エク！ドゥイ！ティン！

ACEF 47th Study Tour in Bangladesh

2014.8.5－8.19

目次

★ 参加者名簿		2 ページ
★ 各チームメンバー紹介	A チーム	3 ページ
	B チーム	6 ページ
	C ページ	8 ページ
★ ACEF・BDP の紹介		10 ページ
★ BDP・JICA スタッフの紹介		11 ページ
★ バングラデシュの紹介		13 ページ
★ 日程表		14 ページ
★ 前半　プーバイル地区活動報告		15 ページ
★ 各チーム地区報告	A チーム（ネトロコナ地区）	16 ページ
	B チーム（ジャマルプール地区）	18 ページ
	C チーム（ボクシガンジ地区）	20 ページ
★ 後半　プーバイル地区活動報告		22 ページ
★ 感想表題		25 ページ
★ Wonderful smile of children		26 ページ
★ 感想文		28 ページ
★ 編集後記		60 ページ

第47回2014夏ACEFスタディツアー(2014.8.6-8.19)

Aチーム(ネトロコナ地区)

1	A1	江間　紗綾香	エマ サヤカ	遺愛女子中学高等学校宗教部教諭
2	A2	前田　恭子	マエダ　キョウコ	ACEF事務局長
3	A3	畑山　せいら	ハタヤマ セイラ	青山学院女子短期大学教養学科卒業生
4	A4	中村　真理奈	ナカムラ マリナ	青山学院女子短期大学国際専攻1年
5	A5	浦川　実咲	ウラカワ ミサキ	青山学院女子短期大学国際専攻1年
6	A6	村　早苗	ムラ　サナエ	立教大学心理学科4年
7	A7	道越　彩花	ミチコシ アヤカ	CHILE 金城学院大学食環境栄養専攻2年
8	A8	住田　梨奈	スミダ リナ	CHILE 椙山女学園大学初等中等教育学科2年
9	A9	福田　悠夏	フクダ ユカ	共愛学園高等学校2年
10	A10	川嶋　乃笑ソフィー	カワシマ ノエミ	女子聖学院高校1年
11	A11	森田　智子	モリタ トモコ	東洋英和女学院高等部1年
12	A12	佐々木　まゆ	ササキ　マユ	フェリス女学院高等学校2年
13	A13	宮森　海帆	ミヤモリ ミホ	横須賀学院高校1年
14	A14	中村　綾乃	ナカムラ アヤノ	横須賀学院高校2年

Bチーム(ジャマルプール地区)

15	B1	徳田　有希子	トクダ ユキコ	フェリス女学院高等学校教諭
16	B2	田尻　真介	タジリ シンスケ	共愛学園高校教諭
17	B3	川嶋　敦子	カワシマ アツコ	日本アイ・ビー・エム㈱ソフトウェアエンジニア
18	B4	前田　七海	マエダ ナナミ	青山学院女子短期大学こども学科
19	B5	新倉　早紀	ニイクラ サキ	青山学院女子短期大学人間社会専攻1年
20	B6	田草川　梨乃	タクサガワ リノ	CHILE 椙山女学園大学メディア情報学科3年
21	B7	竹田　拓哉	タケダ タクヤ	CHILE 南山大学2年
22	B8	和里田　美結	ワリタ ミユ	東洋英和女学院高等部1年
23	B9	外種子田日向子	ホカタネダヒナコ	横須賀学院高校2年

Cチーム(ボクシガンジ地区)

24	C1	井上　儀子	イノウエ　ノリコ	ACEF事務局員
25	C2	佐藤　みよ	サトウ ミヨ	フェリス女学院高等学校教諭
26	C3	安達　正希	アダチ マサキ	横須賀学院高校教諭
27	C4	宮阪　晴花	ミヤサカ ハルカ	青山学院女子短期大学人間社会専攻1年
28	C5	佐々木　柊子	ササキ シュウコ	青山学院女子短期大学人間社会専攻1年
29	C6	若松　いさ子	ワカマツ イサコ	CHILE 中京大学総合政策学科3年
30	C7	藤井　龍成	フジイ リュウセイ	CHILE 中部大学機械工学科2年
31	C8	石井　優衣	イシイ ユウイ	共愛学園高等学校2年
32	C9	牧山　里穂	マキヤマ リホ	横須賀学院高校2年

A team

えまちゃん

A4ームのリーダー☆
中学の先生でもあり、
牧師先生でもある
えまちゃん。
14人という多人数を
まとめてくれました!!
特技は早起き☀
誕生日おめでとうございました☆

きょうこさん

ACEFのスタッフさん☆
若者へのツッコミ
みごとでした☆
きょうこさんの唱が
なつかしくさえある…☆
また参加する時は
お世話になります!!

第一印象はしっかり者の大人
な女子大生…
確かにしっかりしているけど
本当はちょっとCrazy(笑)
おかげで周りは笑いが
たえませんでした☆
好きな曲は昔と今の
アイドル

むら

せいらさん

めっさ頼れるお姉さん☆
いつも冷静に皆を見守って
くれました。
頼りすぎてスミマセン(笑)
冷静なツッコミや発想が
なんだかとてもおもしろくて
個人的に好きでした。
好きな虫はワモ!?

ミセス(あやか)

明るくて 力つな 大学生☆
ニコデモさんが大好き♡
「ニコちゃん」と呼んで
いっしょにいるときはテンション
が変わる!
「まちがいない」という言葉
をチームにはやらせました!
苦手なものは カエル

しょごら(りな)

キャリーぱみゅぱみゅ似の
大学生☆
写真が得意で子どもたちや学校
に一眼をかまえる姿はかっこよかった
第一印象とのギャップが良い!!
カエルにものときしないに冷静
でかっこいい性格です☆

まりぴー

明るくて元気な大学生☆
見た目はギャルな だけど
しっかりした 同じ年とは思えない
くらい大人でした。
マイケルのダンスがキレッキレ☆
カレイチャーショーでもりあがりました!
好きな曲は「Let It go!」♪

まゆ

情熱的な高校生☆
裁縫が得意でサロワカ
がやぶれてしまった人のを
すごい速さで縫って
いました!!
年下とは思えないしっかり
した子で、見習いたい(笑)
好きなもの 新しい生物☆

ぼんちゃん

女の子だけど見た目はカッコイイ
ボーイズ大学生☆ だれよりも頼
れる存在でAチームのムードメーカー☆
後輩からも好かれ、毎日笑って
元気!! そんなぼんちゃんは
偏食でヌードルとポテトが
大好物♡

かがゆか

元気バリバリの高校生
子どもたちとの遊び方
がとっても上手い!!
元気が良すぎてサロンカ
に穴あけまくってました(笑)
特技は変顔☆

あやの

初めは大人っぽい子だなぁと
思ってたけどやっぱり高校生☆
かわいい顔して変顔がスゴイ(笑)
ネトロコナでは小さな恋人が
できました!
見た目が少しベンガリィな
恋愛好き女子高生です♡

のえみー

第一印象はおとなしそうな子.
でも話していくと本性が…
小さく、だけどスバッと
きびしいお言葉が…(笑)
好きなものはヤモリで
特技はかわいい絵♡

みほ

ノリの良い高校生☆
とっても準備が良くて
バンガラは初のはず
なのに、現地で役立つ
物を必ず持ってる!!
とても助かりました☆

ケミー(ともみ)

変顔に目覚めたバレリーナ☆
カルチャーショーでやってくれた
バレェは人が変わったように
かっこよかった☆
苦手なことは片付け
自称器用です!!

2week
ずっと一緒だったね！
ありがとう！
9人とっても仲良し☆
Bチーム Loveで♪

Bチーム

in ジャマルプール

現地の小学校にて

YUKIKO

とくちゃん♡

Bチームのリーダー!!
2週間まとめてくれてありがとう。
とくちゃんの笑顔大好きだ

しんちゃん!!

SHINSUKE

打ち解けていくうちに
とってもおもしろい人だと分かりました！
みんなのツボでした☆

ATSUKO

あっちゃん♡

毎日カレーだったねぇ

Bチームのお母さん♡
どんなときも的確なアドバイスで
私たちを導いてくれました。

ゼットー
Z♡

RINO

Bチームのムードメーカー!!
誰とでもすぐに仲良くなれる
コミュニケーション力の高さはピカイチ☆
Zとバングラデシュに行けて楽しかったぞ

TAKUYA

ティー!!

バングラデシュへの想いを
内に秘めた熱い男!!
語り出すと止まらない!!

NANAMI

なな♡

いざとなったら頼れる存在。
マイペースでかわいい
天然なnanami♡

SAKI

シェリー♡

しっかり者のカメラマン!
いつでも一眼レフを構えて.
エックドウイティーン!!

2週間長いようで
あっという間!!

HINAKO

ひな♡

いつもいつも真面目に
真剣に取り組む姿が印象的!!
とっても気遣い屋さん

MIYU

みゆ♡

1番年下の妹ちゃん♡
誰よりも元気でパワフル
最初から最後まで全力だったね

スラム街の子どもたち

Cチーム

IN ボクシガンジ

儀子さん

儀子さんがいなければ
Cチームは成り立ちません!!
みんなの人気者♥

みト先生

困った時はみト先生!!
何でも持ってます♪
特に裁縫道具!!本当に助かりました♥

あだっち

現地人化しそうなくらい
バンブウの地に
馴染んでました(笑)
ボソっと言うダジャレは
儀子さんの影響??

柊子さん

いつの間にかテイコさんの
いじりの標的に(笑)
そしてチリバディ
となった2人♥

晴花さん

おっとりしているイメージだが
実を退治してくれる
かっこいい一面も!!

龍成くん

高身長イケメン大学生♥
だけど お腹が弱く
ダウンすることが多い
ラミアが大好きな
優しいお兄さん心

ぴょんちゃん

常にのんびり
マイペース(笑)
Cチームの癒し系
女子です♥

優衣

ショートカット+太眉といったら優衣!!
現地人の顔と名前を覚える
さはグループ♥

里穂

黄色が似合う
空手少女!!
口癖は
"ニキルさ〜ん♥"

★ACEF（The Asia Christian Education Fund）
アジアキリスト教教育基金とは

BDP という NGO と共にバングラデシュに寺子屋を贈る運動を行っている NPO 法人の事です。現在の BDP を創立したミナ・マラカール女子の呼びかけに答えて 1990 年 10 月発足、2004 年に特定非営利活動法人（NPO）として認められました。教育支援のみならず、アジア諸問題に取り組む青年の育成も目指し、年 2 回のスタディツアーや ACEF セミナーを行っています。

★BDP（Basic Development Partners）とは

Dr. ミナ・マラカール女史は、保健、衛生教育その他すべての地域活動の根底に「基礎初等教育」がなければならないことを痛感し、寺子屋運動を開始。それを、「サンフラワー教育計画＝Sunflower Education Project ＝ S.E.P.」と名づけました。その後 1990 年 6 月に政府から正式に NGO としての許可を受け、BDP へと改名しました。現在、バングラデシュの 6 地域で活動しています。

BDP JICAの人物紹介

アルバートさん

チームメンバーのことを一番に考えてくれるお父さんのような存在☺

オモルさん

子供想いの面白い方☆お家にも訪問させていただいてすごく優しい♡笑顔がとってもチャーミング!!

プロカシさん

なんでも話を聞いてくれるとても優しい方！歌とダンスが好き!!

ロチョンさん

帽子を身につけているお洒落な方☆楽器を演奏するのが上手!!

ラハジさん

歌が大好きで笑顔がとっても可愛い♡

アンジェラさん

奇麗で頼れるお母さんのような存在♡

アイリーンさん

私達と年が近いのにとてもしっかりしている!! おしゃれでキュートな方♡

Aチーム ネトロコナ地区

ハビブさん

見ためは怖いけれど、ユーモアがあってとっても面白い人☺ワイルドでとっても明るい☆

ヤシンさん

シャイだけどやるときは男前 "タンクトップ"姿が印象的!!女の子からはモテモテ♡

ハモントさん

3ヶ国語を話せてとても日本語が上手な方☺歌声はとってもハンサム☆なんでも頼れるボス!!

ニコデモさん

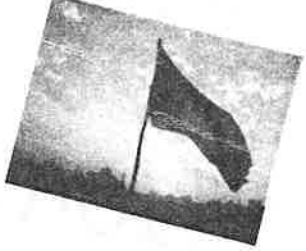
メンバーからの人気者♡お父さんのように心が広くて私達にたくさんのことを教えてくれた優しい方♡

アイロールさん

静かで無口だけど一日中私達を守ってくれた方。さりげない気遣いが嬉しかった♡

Bチーム

バングラデシュの国旗は日本と色違い!!
緑×赤



眉毛がかわいい♡

優しい心の持ち主。
ファルーク さん!
いつも私たちを
想ってくれた。

お酒がバリバリ出来るムタルガさん!
少しSな一面も笑

ごはんを頼めに
よそってくれる笑

すごくフレンドリー♪

いつも
ニコニコ
ムクレス
さん♡

歌うのがとても上手☆

バセットさん
ずっと一緒に
行動して
くれて本当に
感謝。

driverの
ステファンさん!
見た目とのギャップに惹れる
まるで映画の
ジャイアン!

頼りにしてバリバリワおなかが♡

嫁想いな
お父さん
ホビーさん!

バイク姿がかっこいい!!

Cチーム

真面目でワール☆

ディコさん!! 信頼できる運転手さん

Cチームの親分!!
メンバー1人1人を
理解してくれた。
たまにおちゃめ♡

サミュールさん
作る甘々紅茶は
最高!! スマイル
ステキ!!

最高なsmile
ニキルさん!
安心して乗れる
ほどのdriving!

音やんちゃしてました笑

ハシムさん
日本語を必死に覚える
イケメン最年少の
スタッフ!!

みんなとっても
優しかった!

美女
3人組

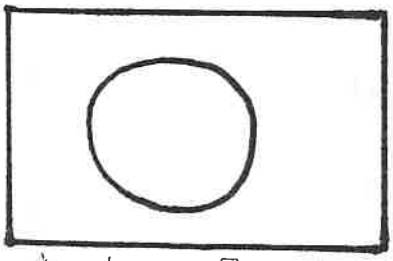
♡ JICAスタッフのみなさん♡

みおりさん ゆかさん さやかさん

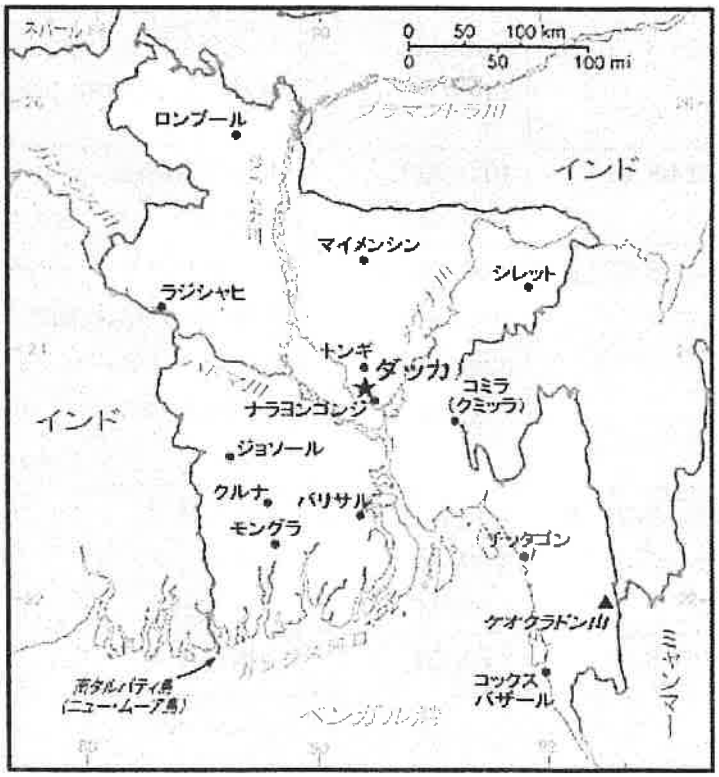
2週間 たくさん助けていただき、
ありがとうございました!!

バングラデシュの紹介

★ 正式名称：バングラデシュ人民共和国
★ 首都：ダッカ
★ 面積：14 万 4,000 ㎢
★ 人口：1 億 5,250 万人（2013 年　バングラデシュ統計局より）
★ 言語：ベンガル語
★ 宗教：イスラム教徒 89.7%、ヒンズー教徒 9.2%、仏教徒 0.7%、キリスト教徒 0.3%（2001 年国勢調査）
★ 国歌：「我が黄金のベンガルよ」
★ 略史：1947.8.14　　パキスタンの一部（東パキスタン）として独立
　　1971.12.16　　バングラデシュとして独立
★ 国旗＆地図：



※日本のとは色がちがいます!!



日程表

Date	Time	Activities
2014.8.6（水）	12:20AM 12:10PM 5:00PM	羽田出発 ダッカ着 プーバイルエリア宿舎到着
2014.8.7（木）	10:00AM 3:30PM	BDP スタッフによるオリエンテーション ガジプール市場へ買い物
2014.8.8（金）	9:00AM 8:00PM	各地区へ出発 各地区の宿舎で夕食
2014.8.13（水）	9:00AM	各チームプーバイルに戻る
2014.8.14（木）	10:00AM 5:00PM	ダッカスラム地区の Lalkuthi school 訪問 プーバイルのミレル市場で買い物
2014.8.15（金）	9:00AM 4:00PM	ドミニク神父の教会訪問 バシャニエ BDP 小学校でカルチャーショー
2014.8.16（土）	10:00AM 5:00PM	ダッカ市内国立博物館見学 BDP スタッフ、オモルさん宅訪問
2014.8.17（日）	8:00AM 10:00AM 3:00PM 9;00PM	バドゥンカトリック教会にて礼拝 BDP 職業訓練校訪問 ウットラ「アーロン」へ買い物 江間先生バースデーサプライズパーティー ラップアップディスカッション
2014.8.18（月）	7:30AM8:30AM 9:30AM 1:35PM	閉会礼拝 空港へ ダッカ出発
2014.8.19（火）	6:55AM	羽田到着

PUBAIL

-プーバイル-

行ってきまーす!!

Aug.6

夜、羽田出発
タイ経由、

夕方 無事に入国。バスで宿舎へGO!
クラクションがあちこちで鳴りひびいていてうるさい(笑) 交通ルールなんて関係ねえ!! というように走りぬける車、バス、バイク、ト!! デコボコ道路もくねくねって軽いアトラクションみたい笑
その途中でも学ぶことがいっぱい…

宿舎につくと近所の子どもたちがお出迎え。
みんなシュンドール(かわいい) ♡
初日っからあそんでヘトヘトでした。でも楽しい☆

Aug.7

BDPのスタッフのみなさんによる
オリエンテーション
バングラデシュのことを日本と比べながら
学びました。私たちへの向けかけも…
バングラソングもうたってくれました♪

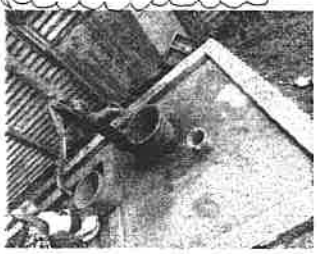
みんなきまってるー☆

午後は町のマーケットへ🚌
いろんな色のサロワカミューズがいっぱい!
どれもかわいくて迷いました…
店員さんとの値段交渉で安く買えて
Lucky☆

in Netrokona

We are Ateam

生活に重要な井戸



Aug. 8

途中車が止まるアクシデントが何度があったけど…
無事ネトロコナに到着!! かわいい子どもたちが迎えてくれた
ネトロコナでの生活がスタート☆

Aug. 9

AM ベタティジェルパラ学校訪問!!
学校はけっこう広い! 個人芸をやってくれた子どもがたくさん!
みんなおごいしかわいい♡

PM ★ショアルカンダル小学校訪問!!
ものを使わず遊びました♪
アルプス一万尺やなべなべ底ぬけなどでのふれあい♡

★ヒンドゥー寺に訪問!!
BDRスクールの先生のお宅を訪問!!
礼拝するところや、馬と象が合体したような銅像があって私生活を見ることができました

BDPスクールさん

出逢いがたくさん♪

先生のお宅

Aug.10

AM ☺ 力車で学校を訪問!!
力車はお尻痛くなるけど楽しい
学校までの道で子どもたちがお出迎えしてくれて、着いてからはダンスや歌を披露してくれた

PM ☺ 週に一度来る市場へ! シートをひいてくだものや野菜、魚を量り売り
たくさんの人が集まってて賑やか!!

Aug.11

AM ☺ 朝はリーラン節の練習がてら体操
BDPスクールをボートで訪問!! 2つまわりました。
1つはトタン板の校舎で机とイスがない学校
それでも一生懸命に、楽しそうに勉強してました
ボートの屋根にのってボートトリップ
人々とリリとの付き合いも見れました!
他の町の様子も見に行けました。

PM ☺ 雨がひどくてゆっくりお昼寝 ZZ...

英語の勉強

Aug.12

AM ☺ 力車で学校訪問!!
途中からは歩いて学校に到着!! 入口をバナナの木の葉や花でキレイにかざって迎えてくれました
授業を見学してからタトで遊びました!
走りまわってつかれたけどやっぱ楽しい!
力車の運転手さんとも仲良くなれました

サリー体験

PM ☺ サリーを学校の先生たちに着付けてもらいました
メニディで手足に絵もかいてもらい
貴重な体験ができた
最後の夕食は豪華 モジャ(おいしい)

Aug.13

ネトロコナ、子どもたちそしてスタッフさんとのお別れの日... 感謝の印にうちわをプレゼントしました!!
みんなありがとーう ドンノバーット!!!!

We went to jamalpur

<ジャマルプール>

年齢はバラバラ
でも、とっても仲良しなの♡

By team B

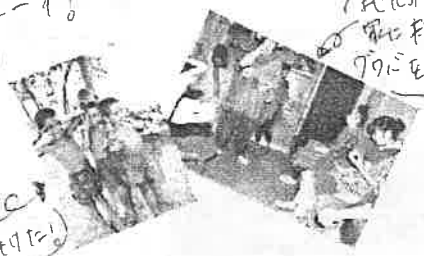
しんちゃん。 とこちゃん。 ミエリー。 ゆなみ。 みゆ。
あっちゃん。 ↑。る。 ひろ。

"Aug. 8"

4時間くらいかけて、ようやくジャマルプールに
到着!! イェーイ!

予想以上に
自然豊かなところ
びっくり◎◎

お宿を頂き、
BDPスタッフの方々の
紹介の後、お散歩しました!



地元の人が
家に招待してくれ、
ごちそうをしてくれた♡

あっという間に
子供達ともうち解けた!

"Aug. 9"

BASHOCARA
SCHOOL

午前中は、BASHOCARA SCHOOLという
ジャマルのBDP schoolの中では、最も生徒数
が多い学校に訪問しました。
子供達は元気いっぱい。
私達は彼らと、たっぷりと遊びました。
午後は、午前よりは小さめの、KUTUBARI
SCHOOLへ。そこでは、ダンスを披露しあい
ました!! 小さい子も手足を上手に使って
一生懸命踊ってくれました♡

踊ってくれた!

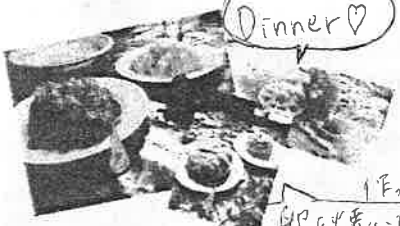
KUTUBARI
SCHOOL

"Aug.10"

教会に行くはずが、大雨になってしまったので
shoppingをしに行きました〜!
その道中に地元のHigh schoolがあり、その学校を訪れました。
みんな温かく迎えてくれました。

近所の子供達とも仲良くになり紙でお花を作ってプレゼントしてくれました!!

午後は、BISHNO SCHOOLへ行きました。授業ではインドのお祈りの仕方を学んでいました!すごい!



この日のDinnerは特別!
BDPスタッフの方々が私達のために、cookさんに頼んで、いつものカレーとは違うご飯を作ってくれました!
卵を焼いたもの、じゃがいもをねって作ったもの、ポムポムパイなどなど

"Aug.11"

この日のBreakfastはメードル!
久しぶりに食べるめんはうまい!

午前中は、MOHONPUR SCHOOLへ〜
子供達はしゃぼん玉で喜んでくれました☺

午後は、カルチャー交換をしました!
バングラの文化に、どっぷりとつからせてもらいました!

"Aug.12"

最後のジャミルでの学校訪問、今日バッチリ!

午後はスタッフさん達とBoat Tripへ〜
歌を歌ったりして楽しみました〜

"Aug.13"

Boat Tripの後は、私達が乗りたがっていた、車に乗って、shoppingに行きました!!

13日、別れの日。。
みんなが帰りたがらないという言葉を連呼!この場所がメッチャ好きになったぞ

ドンノバット!!

Cチーム　ボクシガンジ地区　　（電気、水道、ガスなし）

8日（金）

９：００　ボクシガンジへ向けて出発（マイクロバス一台）

BDP スタッフ　ティコさん、ニキルさん（運転手）。　夕方には到着する予定が、Ａチームの車の故障を助けに行ったり、ジャマルプールへＢチームメンバーの荷物を届けりしたため、１９：３０頃ボクシガンジに到着しました。とにかく他者を助けようとするスタッフのスピリットを知りました。ボクシガンジの宿泊施設では、ホタルが飛び交っていました。到着後夕食をいただき、夕拝を行いました。

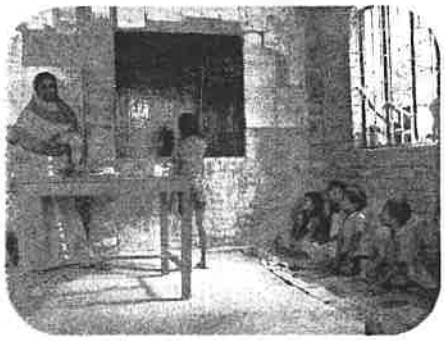
9日（土）

１０：００　学校訪問へ出発

学校訪問①［バルジュリスクール］

１クラス 30 人、全校で約 150 人。

３チームに分かれてクラス訪問。



学校訪問②

［カマルゲドラスクール］全校で約 90 人

夕方　今年（2014 年）５月 27 日に天に召されたマスッドさんのご家族にお花料をお渡ししました。マスッドさんは、BDP がこの地域で活動を始めた時からのスタッフでした。お一人でこの地域を歩き回り、ガロの子どもたちとベンガルの子どもたちが一緒に学ぶ BDP 寺子屋小学校をひとつずつ開校していかれた方です。いつもニコニコと笑顔を絶やさず、スタディツアーメンバーにも優しいお兄さんでした。

（上の写真）インドとの国境線の近く

10日（日）

午前　カトリック教会の礼拝に出席（神父はフィリピンの方）、教会の関連学校見学

午後　自由時間～のんびり休んだり、子どもたちとひたすら遊んだり～

11日（月）

学校訪問③　マスタバラスクール
（2014年５月開校の新しい学校）

学校訪問④
コネカンダスクール

午後　ボートトリップ
途中、大雨に遭いました。

12日（火）

学校訪問⑤　ドゥムトゥラスクール
（研修施設から一番近い学校、徒歩５分）
生徒の家訪問（ルベル君、シャンティーちゃん）
ガロ族の村長さんと再び会う。

Ｃチームの女性メンバー
手にメンティーをしてもらう

ボクシガンジで過ごす最後の夜、ということで
ＢＢＱ（バーベキュー）をしてくださいました。

13日（水）

ボクシガンジを離れ、プーバイルへ行く日（戻る日）
よく遊びに来てくれた子どもたちも見送りに来てくれる。
寂しくなって泣くメンバー多し。

「アバールデカボベ」（またあいましょう）

またいつか会えますように！ボクシガンジからプーバイルへの所要時間は約７時間。

8月14日 スラム街の学校訪問

光輝く時間すたぎるパワー満点！希望！！

32人での学校訪問はなにげに初めて！！

Aグループが農村からプンバいに帰ってきた！！

基地の敷地内にあるラルクティはBOPスクール
の中でも各モデル校々。6回のお引越を経てもなお健在するのは、先生方、生徒及びその親達の熱意に支えられているから。授業に加させてもらいとてもワクワクする程活気にあふれてます！！

街中の狭い路地に面したモニプール学校。1階にしれさな教室がみっちり入ってて、どの教室にも子供達のキラキラがたくさん！！

水の使い方（マークのしてある井戸水にお使ってOK）をとてもわかりやすい紙芝居で指導しています。
ついでに英語とベンガル語も自然と覚えちゃうのがすごい♡

プーバイル
の宿舎から
歩いて
すぐ！！

レル・バザールへ～好奇心旺盛な買い物好きな人達～

7年後にはミレル・バザールで、アクセサリー・お茶・お菓子を買いました。

8月15日 カトリック教会☆聖母と幼子の教会☆を見学。

ファザー・ドミニクのお話を聞き、
その後テラスでお茶をいただきました。
ジャンスカティン（麺）も♡ご馳走様でした。
少数民族の子供の教育支援をしているとのお話で、
教会向こうの森の奥から連れてきたという男の子を連れてきて紹介してくださいました。

各チームの素晴らしさを見せよう!!

Culture Show

クリスチャン村のバシャニヤ小学校にて。

A班:「散歩」(歌と振り付け)、個人技4名 B班:一世風靡セピア、AKB48「恋するフォーチュンクッキー」

C班:ソーラン節(個人技(のりこさんから「こんなにカルチャーショックらしいカルチャーショックはじめて!!」)

個人技では空手、バトン、バレエ、ダンス(マイケル)!!いろんっと、多種多様な文化を観ることができました。ガガ・ノエミ・トモ・マリピー・リホ!!かっこよすぎました☆各チーム最高でした☆ 一方!!現地の子供達のDanceやドレスアップした姿も目が離せませんでした!!綺麗!!オモルさんの息子さん達も、かっこよく2人で踊っていました。☆

8月16日

前日15日は独立記念日。休みの為に特別にスペシャル!!

独立記念博物館へ

バングラの歴史、宗教、近代画、家具、農具、民族、動物、植物、

上階 → 階

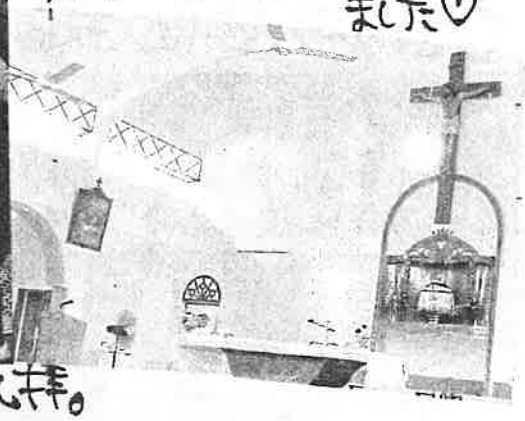
独立戦争中の写真で、どれ程の悲惨な出来事が、そしてたった46年前にあったということが初めて伝わってきた本当でした。8/15は日本にとっては終戦記念日。何だか重みが深まり、共有することで平和を祈える、そう感じました。

館内は歴史展示フロア(最上階)から改装していて、これから先の世界からの見物客にたくさん知ってもらえそうです。

オモルさんのウチくる？行く行くー♪

新築建設中のオモルさんのおうちにおじゃまさせてもらいました♡オモルさんの息子さん(カルロ)ショーに出てた！ともいました(弟くんの方)♪

おりこうなわんちゃん(ドギー♡)や おいしいパナ、ジャンブラー、ジャンスクティン、チャも、たくさん楽しませてもらいました♡



8月17日

朝ミサ→宿舎からすぐのカトリック教会でお祈り。音楽が多く太鼓のような楽器も鳴っていました。私達日本人の数人も献金をしました。

その後 職業訓練東校へ。 講師はあの人!!

アイリーンさんはPCクラスでMicroSoftOfficeやフォトショップ等、BOPスタッフのロヨンさんはエンジンの製作クラス(車、バイクのエンジン)、プロカシさんは電気及びスイッチ・そのシステムづくり…又違う一面を拝見しました。生徒さん達も先生をとても敬ってました☆☆

電気クラス

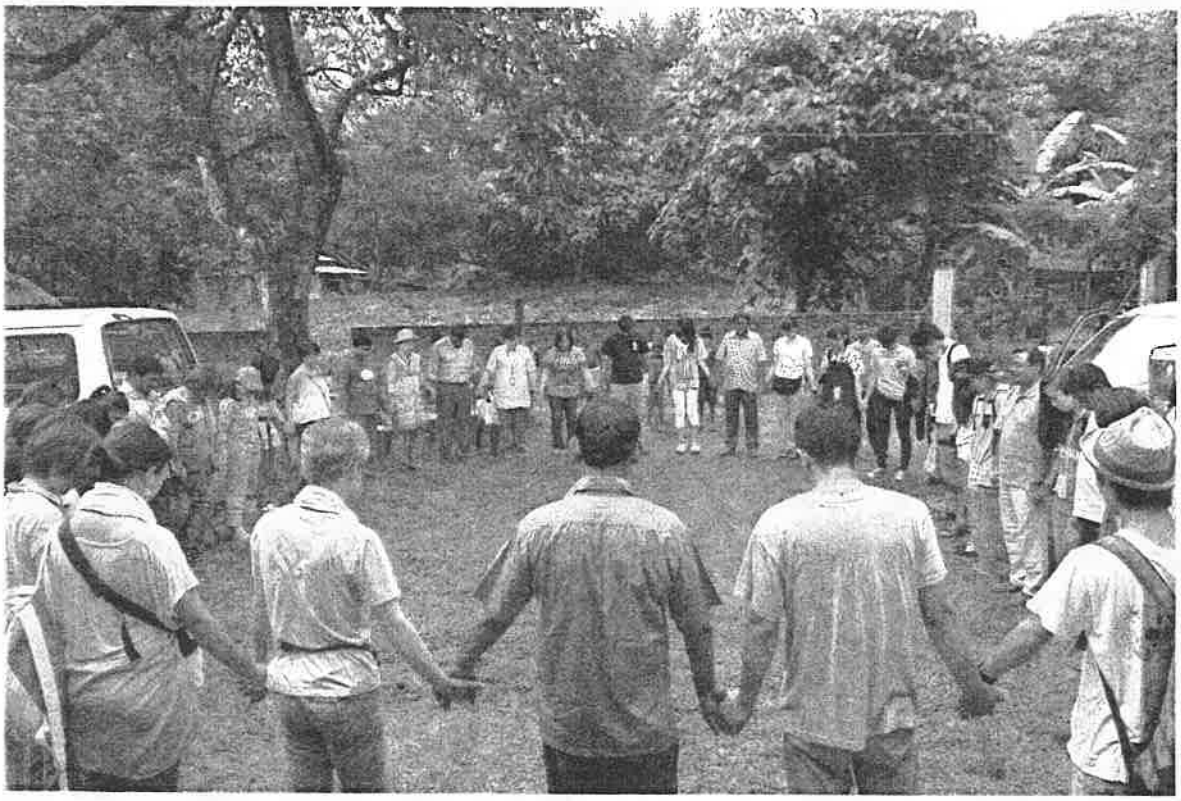
あと!! アーロンに行きました(セレブ御用足)1.5ちんくらいじっくりみました♡♡

夜は ラップアップミーティング

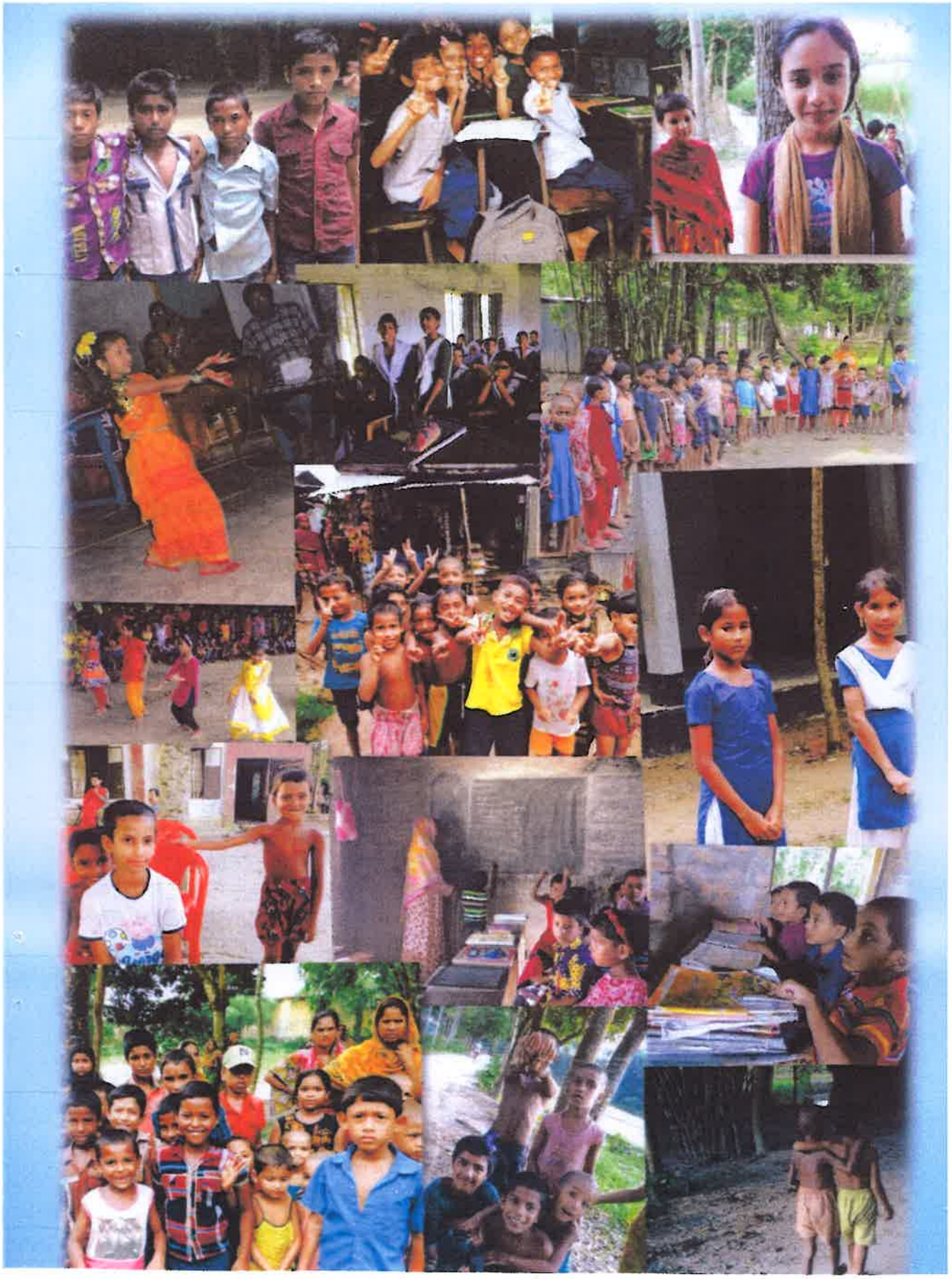
そして江間ちゃんのBirthday!! パングラのバースデーケーキもすごい!!♡ おめでとう～♡♡ そして ラップアップミーティングでは各班のシェアリングのまとめを代表2・3名が語りました。(上手にまとまらずごめんなさい) 各々に深く、何にもイヤな難しい思いい出と思いを感じました。

江間ちゃんおめでとオ!!!

感想文



Wonderful smile of children



しあわせのバケツ

Ａチーム　江間紗綾香

３年前、洪水の影響でダッカにある学校、ラルクティ・スクールとモニプール・スクールには行けなかった。頭の中は、その当時の校舎や生徒の様子でいっぱいだ。しかし、６年ぶりに訪れてみると･･･あれ？？こんな場所だっただろうか？もう少し広い教室だったような？聞けば、数年に一度、政府から立ち退きを命じられたり、家賃の高騰があったりで場所を変えざるをえなかったとのこと。クリケットのワールドカップが開催され、少し交通渋滞が解消され、街中も少しきれいになっている一方で、どんどん隅に追いやられている人たちも存在する。それでも一所懸命に、目を輝かせて学ぶ子供たちを見て、「せめて学ぶ機会、場所が奪われないようにしないとなぁ」としみじみ感じた。

購入しておきながら、なかなか読まなかった絵本がある。タイトルは『しあわせのバケツ』。この絵本は、“アメリカの母親が選ぶ絵本”第１位にもなったそうだ。帰国後、なぜか読みたくなり、さっそく手にしてみた。内容を簡単に紹介すると･･･

誰もが持っている「しあわせのバケツ」。目に見えないけれどみんな持っているバケツ。なぜ、みんながバケツを持っているか？それはバケツに良い心や良い気持ちを入れておくため。バケツがいっぱいになると、とっても幸せな気持ちになれるから。どうすればバケツを幸せでいっぱいにすることができるんだろう。そのためには、周りの人の協力が必要。周りの人も自分のバケツをいっぱいにするためにはあなたが必要。バケツを幸せでいっぱいにする方法は、誰かに好きな気持ちを伝えたり、親切にしてあげたり、微笑みかけたりすること。あなたが誰かのバケツを幸せでいっぱいにすると、自分のバケツもいっぱいになるんだよ！「しあわせのバケツ」をいっぱいにするのは楽しくて、簡単なこと。誰かのバケツを幸せでいっぱいにすると、自分のバケツもいっぱいになることを忘れないで。･･･大人でも考えさせられる絵本である。

３回目のスタディーツアー。振り返ってみれば毎回、私の「しあわせのバケツ」は幸せでいっぱいになっている。BDP のスタッフから、子供たちから、バングラデシュで出会った人から、ツアーに参加したみんなから。私が持っているバケツには入りきらないほどの幸せをもらっている。何年経っても、その時もらった幸せは私を支えてくれている。そして、ふと思う。ツアー中、私は誰かのバケツに少しでも幸せを入れることができたのだろうか？現在、自分の心に問いかけている最中。

絵本の最後あたりに次のような文章がある。**“さっそく今日から、バケツを幸せでいっぱいにできる人になってみない？”**もちろん自分のバケツではない。誰かのバケツを幸せでいっぱいにすることだ。私の当面の目標は、家族、友人はもちろん、生徒たちや職場の先生方、教会でお世話になっている方々、何よりもバングラデシュによってつながったツアーメンバーと BDP スタッフ、子供たちのバケツを幸せでいっぱいにできる人になること。当面とは言ったが、「誰かのバケツ」の範囲が広がっていってもずっとずっと大切にしていくべき存在で、ずっとずっと彼らの「しあわせのバケツ」について考えていくべき存在であることは確かである。そして、多くの人に言いたい。**“さっそく今日から、バケツを幸せでいっぱいにできる人になってみない？”**って！！

第 47 回 ACEF スタディツアー

前田　恭子

2011 年の 3 月に、初めてバングラデシュに行った時、アジアの最貧国であることしか知らず、着いた途端に飛び込んでくる雑多な情報に、脳が対処しきれないと感じた。日本は、秩序を重んじる国（一部を除くかも）で、交通に関して言えば、電車も自動車も歩行者も整然と動き、東京の真ん中でもあまりクラクションの音を聞かない。だが、バングラデシュは、日本の 40%ぐらいの国土に 1 億 6 千万の人口とは言え、「これはないでしょう。」と言いたくなるほど混み合って、無秩序に人・自動車・リキシャがクラクションの嵐の中を右往左往していた。渋滞で止まると（信号は無いし、あっても止まらない）、すぐに窓にへばり付いてくる物乞いの人たち、結構衝撃だった。

今年の夏のスタディツアーで、バングラデシュは 7 回目となったが、やはり日本とのギャップに一瞬怯む。その縮んだ心を、迎えに来てくれた BDP のスタッフの笑顔が解してくれ、この国のありのままを受け入れる準備ができる。混み合い具合は変わらず、少し見栄えの良いビルが増えたかな？きれいな自動車も多くなった、というぐらいがこの 3 年間での変化。この国を、高校生や大学生の瑞々しい感性でどのように受け止めてくれるのだろう、というのがいつもスタディツアーが始まる時の気持ち。ワクワクするような、少し心配なような。シェアリングでどんな話を聞かせてもらえるのだろうと。

この夏は総勢 32 名という大所帯で、どんなことになるのか心配だったが、皆よく打ち解け、助け合って、大きな怪我や病気もなく、濃密で有意義な 2 週間を過ごしたようだった。
ダッカ近郊のプーバイルにある BDP のトレーニングセンターでのオリエンテーション後、3グループに分かれて訪問した農村で 5 日間を過ごしたが、それぞれ地域の特性によって経験することも違い、交流した人々も違う。プーバイルで再び合流した際に、グループを混ぜてのシェアリングをして、それぞれの経験を報告し合うメンバーの輝く瞳を見て、彼らがいかに多くを学んだかを感じることが出来た。

バングラデシュを経験することによって、日本や自分の家族、また、自分自身を見つめることができ、そして、自分に関わることに感謝する気持ちを持つことが出来たようだった。
バングラデシュが抱えるたくさんの問題、特に、実際に見てきた子どもたちの教育や将来の問題に心を痛め、大好きになったバングラデシュの人たちのために自分に何ができるだろうと真剣に考えていた。その答えはそれぞれが時間をかけて考えれば良いと思う。だが、彼らは既にバングラデシュに固有名詞で呼べる友達を持ち、その友のためにも、今回経験したバングラデシュのことをたくさんの人に伝えたいと言っていた。 そして「今自分の目の前にある、やるべきことに全力を注ぐ。」とも。

私同様、彼らも初めて見たバングラデシュに戸惑ったと思う。だが、この 2 週間の経験での大きな学びと成長は素晴らしいものがあり、一緒に行動していた私にとって、大きな喜びとなった。

大好きなこの国の魅力

畑山　せいら

バングラデシュへ６年ぶりに行った。以前の経験からずっと思いを馳せてきたバングラデシュ。今年になって再訪できるタイミングがようやく来た。

今回のスタディーツアーで私が見えたものは「混沌」だった。それは、以前の滞在から年月による自身の成長・思考の複雑化とは別の話だ。今回のスタディーツアーで目に映った多くのものを未だ整理出来ず今に至っている。

この６年の間に、日本でバングラデシュの人に遇うことが何度かあった。日本の先進技術を学んで帰りたい、日本にベンガルカレーを広めたい、日本で働き稼いだお金を母国の家族の元に届けたいなど来日理由は多種多様。年々出会う頻度が増えている気がしていた。
だから、バングラデシュの現状も何が変わってきているのだろうと予想した。

やはり首都ダッカは変わりつつあった。その変化は、街並みより人に現れていた。
以前も多くの人が携帯電話を所持していた。当時でさえ国民の生活柄から浮いたアイテムに見えたものだが、更に今のダッカでは人々が iPhone など世界的に見て比較的新しいモデルの携帯電話を使用している。それが違和感のない景色なのだ。それに iPhone の回線がある、つまり庶民でもインターネットを簡単に閲覧できるのだ。

それは良くも悪くもグローバル化への第一歩だと思った。グローバル化という変化自体は素敵なことだと思うが、私達日本人がグローバル化によって何を失くしてきたか、情緒、深み、大切にする気持ち。確実に薄れ、それを思うと胸が痛む。それがこれから、このバングラデシュの人々にも起こるのか。私は決して「古き良き時代派」や「アンチ・便利な生活」な人間ではないが、発展はよりスマートであるべきだと思う。そのスマートの全容こそまだこイメージ出来ていないのだが。ただ、疼く気持ちがあり、それによって気がついた。容易に変わってはいけないものも在るのだ。変わってはもう元には戻れないものが沢山あるのだ。

人々の文化は発展し始めたが、街並みと貧困層が全く追いついていない。それにダッカはダッカ以外の町から手の届かない存在になっている。田舎町が宗教を重んじているのと対象にダッカは宗教に関しての自由度が多い。それはゆくゆく首都外もそうなって行くという事なのか。これも後になって引き返せない事柄だと思う。

一方、教育では輝かしい物を拝見した。教育の内容や子供達の姿勢。そこにはまだ、学ぶ意欲が純粋に溢れていた。だが、この子供達が進む道はもちろん彼らの母国が基盤である。そのための国づくりができていない。下手すればこのまま、片寄ったグローバル化に子供達も染まっていくのではないかと思ってしまう。

余計な世話焼きかもしれない。だが、ベンガル人の素敵な性分は世界に誇れるものなのだということを本人達に気付いてほしいのだ。子供たちにいい教育が身につくのだから、活かす場は最良であってほしいと当然願う。私に何ができるだろう。

小さなことからでも、すぐに始めたい。

すべてに感謝

中村 真理奈

私がバングラデシュのツアーに参加しようと思った理由は、日本とバングラデシュの生活を比べてみて自分を見つめ直し、新しい体験をしたいと言うものだった。初めてバングラデシュの生活を目の前にして貧富の差はあり、子供達には叶わない夢があるという現実を知ることができた。様々な BDP スクールに行った時に子供たちに将来の夢を聞いたら、写真家になりたいとか、医者になりたいと言う子が多くて、大学に行きたいと言う子もいた。私たち日本人は普通に小学校に行って、中学に行き、高校、希望すれば大学にもいけることは恵まれていることだし、普通のことが普通でないということも改めて考えさせられた。バングラデシュの子どもたちは学校に行きたい！勉強したい！という強い意志があり、日本の子どもは学校に行きたくない、勉強したくないからさぼるというような子が多く日本と比較すると逆であり、日本がしっかりと見習わなければいけないと感じた。学びたいけれど学べない子もいて学校に行けない子もいる、そんな子供たちのためにも学校に行ける幸せ、学べる喜びを感じ学習していかなければいけないと思った。

数々の子供たちと出会って、ダンスが好きな子、歌が好きな子、お姉ちゃんのように大人っぽい子、一人一人特徴を持った子が多かった。その中で、グループで分かれて行ったネトロコナ地方で最後に訪れた学校で出会った一人の女の子がいる。女の子の名は“ジョマ”。ダンスが上手で歌も上手。その子と一緒に踊ることで、言葉は少ししか伝わることができないけれど、違ったコミュニミケーションをして仲良くなった。その時、私はバングラデシュの準備会の話の中で「日本に帰ってきて、あの子はどうなっているのだろうかと思いだし、また会いたいと思う人を作って来てください。」という言葉を思い出した。まさにそんな存在になる子が現れて感動し、嬉しい気持ちでいっぱいになり、ジョマのことをもっと知りたい、話したいと思った。でも出会いは偶然で別れは突然だった。日本とバングラデシュでは全く違う生活習慣で、見た目も違うけれど、互いに好きな物や共通点があれば仲良くなることができるし、言葉は通じなくても心は通じ合うことができることに感動と幸せな気持ちになった。遠い距離だけれど私はジョマのことを忘れないしまた会いに行きたいと思う。

最後に、バングラデシュの人達はみんな素敵な笑顔を持っていた。辛いことの方が多いけれど笑顔で私たちに手を振ってくれるし、一緒に遊んでいる時の楽しそうな顔を見ているとこっちも嬉しくなった。このような素敵な出会いと感動を与えてくれた BDP のスタッフの方々、スタディーツアーのメンバー、支えてくれた家族に感謝し、自分のたるんでいた部分を直し、日本で平和に生活できる幸せを感じて行きたいと思います。ありがとうございました。

大きな学び

青山学院女子短期大学国際専攻１年　浦川実咲

今回のACEFスタディーツアーに私が参加した理由は、世界中の国々について知りたい、と前々から思っていたからです。その結果、多くの発見と学びがありました。

家を出てからダッカまでと、飛行機に乗っている間中ワクワクドキドキが止まりませんでした。どんなところだろう？子どもたちと遊ぶのが楽しみだなぁ、などとずっと考えていました。待ちに待ったダッカの空港です。駐車場に向かい、車に荷物を載せているとき、片足のない物乞いの男の子が私の足元におしりともう片方の足を使ってゆっくり近づいてきました。そのとき私は、衝撃のあまりとっさに目を逸らしてしまいました。自分は無力で助けてあげることができないのは事実です。しかし、目を逸らしてしまっていいものか、自分にできることは何なのか、考えても答えに行きつかず何もできない自分が情けなくなりました。楽しみにしていたバングラデシュの一日目で現実を目の当たりにしました。あの子はその後どうしてるのかが気掛りです。

各小学校を訪問した時は、子どもたちの様子に感心しました。当たり前で、そうでなければいけない話なのだとは思いますが、子どもたち皆、一生懸命勉強に打ち込んでいたのです。熱意をもって教える先生方、それに応える勉強の大好きな生徒たち。日本では勉強が好きですか？と聞かれて、YESと答える人は少ないような気がします。学校に行きたくない、宿題や勉強がめんどうくさい、と考える子どもの方が多く、勉強好きだ、と答える人の方が珍しいような気さえします。自分自身勉強は大嫌いで、恥ずかしい話、学校をさぼるときもありました。小学五年生の子どもたちに何の科目が好きですか？と聞いたとき、大多数が「English！」と答えました。次に、何の科目が一番苦手ですか？と聞いたとき、半数が「English！」と答えました。なんで一緒？と最初は笑ってしまいましたが、ここの子どもたちは苦手でも勉強が好きだから好きになれるんだなぁ、と感心しました。おそらく日本の子どもたちに同じ質問をしたらそれぞれ違う返答が返ってくるのではないでしょうか。苦手なものは嫌い。できないから嫌い。私もそうでしたし、周りの友達もそういう子が多かったように思います。バングラデシュの子どもたちには頭が上がりません。バングラデシュには初等教育が必要、しかしそれはバングラデシュに限らず、発展した今の日本にも必要だと思います。むしろ、バングラデシュを日本は見習うべき。と言うより、私が見習うべき。恥ずかしいですが、もう大学生にもなって勉強しなきゃと痛感しました。

ここには書ききれないくらいの発見と学びがありましたが、自分はもっと学べたんじゃないかと反省しました。メンバーとその日について話し合う時間に、みんなの意見を聞いていて、「そう云う視点もあったのか」「そこには気が付けなかったな」などの反省点ばかり上がってきたのです。自分はまだまだ未熟でまだまだ学べることがいっぱいあります。また絶対ツアーに参加しようと思っているので、その時にはもっと視野を広げられるように今のうちから脳みそと目を鍛えておきたいです。今回参加できて本当に良かったです。

バングラデシュで得た学び

立教大学４年　村　早苗

２年前、バングラデシュの活気と混沌と人々のおおらかさに魅せられ、完全にこの国の虜となった。大学２年生の私は、ツアーを終え“途上国の発展に持続的に関わっていきたい”という漠然とした希望を持ち、観光業で途上国と支え合おうと決心して就職先も旅行会社を選択した。ぼんやりとした人生観しか持たない私に将来の指針を与えてくれたこの国に今一度立ち戻って、“原点”を再確認したい。そんな気持ちからツアーに参加することにした。街に溢れるリキシャの波や、物乞いの人々、スコール、青空教室で学ぶ子ども達。目に飛び込む全てが新鮮で刺激的で、前回のツアーは興奮と高揚の旅だった。そして、今回のツアーもそれはそれは本当に楽しいものだった。と同時に、私としてはかなりの自省と後悔を伴う旅でもあった。

最も印象的で深く内省するきっかけになったのは、ネトロコナでの初日の騒動であった。私達が到着した夕方、前庭が埋まる程の沢山の子ども達と村の人々が BDP の事務所の前に集まっていた。私達は“喜んでくれるに違いない”と思い、各々持参したビーチボールや折り紙、シャボン玉などのモノを取り出した。そして、求められれば様々なモノを配り、せがまれてカメラで写真を撮り、Do you have a pen? と何度も聞かれよくわからないままペンを子どもに手渡した。その結果、子ども達の一部は“風船もう無いの？”“私には折り紙くれないの？”という要求しかしなくなり、手渡したモノは知らない間に持ち去られてしまい、力の強い男の子たちがモノを全て独占してしまい、何も遊ぶことのできない小さな子達で溢れてしまった。

これらの失敗は、“モノがあれば幸せだ”という現代日本の価値基準をそのままバングラデシュに持ち込んでしまったことが原因だと感じた。日本とは違う別の幸せの概念を持つこの国を、日本流の価値のモノサシで荒らしてしまった自分の軽はずみな行動を猛省した。“日本人はばかでやさしくて何でもモノをくれる人”という概念をバングラデシュの子ども達に植え付けてしまっていたらどうしようと、とても恐ろしくなったし、帰国した今でも大変な心残りとなってしまった。

ただ、この経験を経て“国際的に活動する上で、日本しいては自分の価値基準だけで安易に行動しない”という学びを得ることができたのは、このツアー最大の収穫でもあった。“モノを与えれば幸せ”という価値観に基づいて、途上国にハコモノを建築したり、校舎のみを寄贈したりする支援を、正義だと確信したまま日本はまだ多く続けていると思う。私は自らの失敗を通して、いかにモノに縛られた日本の幸福論が脆いかを実感することができたし、決して同じ過ちを繰り返さないと心に決めることができた。

この失敗から、私達のグループは “モノを使わない遊びをしよう”と決めた。言葉が通じない中で、モノ無しで遊ぶことはかなりの労を要するし頭を使うものだった。そのかわり、ロンドン橋やにらめっこ、ダンスなど言語やモノを飛び越えた深い交流を行うことができた。私達はこれらの素朴な遊びを通して、子ども達と本当のボンドゥ(友達)になれたのでは、と感じている。

バングラデシュは魅力に溢れている。少しずつ近代化していくこの国にいる沢山のボンドゥ達に会いに、またバングラデシュに行きたい。

バングラデシュに行って

金城学院大学　道越彩花

私は学生ボランティア団体CHILEに所属していて、かねてから行きたいと思っていたバングラデシュに行くことができました。いままで誰から聞いた情報よりも、実際に自分が見て肌で触れることの大切さにすごく気付かされました。行くまでは、途上国であるバングラデシュについて正直、同情の気持ちがあってかわいそうだなと感じていました。でもバングラデシュに実際に行ってみると人がイキイキしていて、かわいそうな国というよりも、この国は成長している段階なんだなというのをすごく感じました。村に行ってみると、子どもたちもすごく一生懸命に学んでいて、その姿に私自身、学ばされることがたくさんありました。ベンガル語を話すバングラデシュ人としての誇りを誰もが持っているし、生活がままならない状態であっても日々の生活に幸せを見出している姿を見ると、心を打たれるものがありました。

バングラデシュに行くと決めるまで、親の反対もあってなかなか決断できませんでした。私の考えでは、現地に行かなければ実際に支援として何が不足しているのか、何が必要とされているのかが分からないのではないかと考えていました。しかし、私の両親はなぜ行く必要があるのか、高いツアー料金を払ってまで行くことが本当にバングラデシュのためになるのか、ツアー料金を払わずにその金額を寄付したほうがいいのではないかと、言われました。私は、両親に反対されて初めて、実際にバングラデシュに行くことの意味や、バングラデシュにとって私は何をしたらいいのかというのをすごく考えました。初めは反対されてすごくショックで、なぜ自分の言っていることを分かってくれないのかと思っていました。しかし、実際に行ってみて反対された理由も徐々にわかってきて、もちろん外国だし日本とは治安の安定さも全然違うので、身の保証もない。ツアー料金を寄付せずにあえて自分が現地に行く意味はなんだろうとすごく考えさせられる2週間でした。反対されないままもし参加していたら、私がバングラデシュに行く本当の意味さえも分からないまま帰国していただろうと思うと、反対して私のことを心配してくれた両親に心から感謝しています。

もし、バングラデシュに行こうか迷っている人がいたら、絶対に行って欲しいです。時間がある学生さんは、特に今行って欲しいと思います。人生の中で本当に濃い2週間になると思います。私自身、バングラデシュに行ったことに後悔はないし、高いツアー金額以上のものが得られると思います。バングラデシュに行けたことは、私の人生の中での誇りです。また、時間が経って自分が人間として自立し、物事が判断できるようになったら、このツアーに参加したいと思います。学生ボランティア団体CHILEに入って、バングラデシュという国に出会えて、こうして肌で触れ合えたことが私の人生において大切な財産です。本当に行かせていただいた周りの人にも感謝しています。ありがとうございました。

視野を広げて見てみると。

住田　梨奈

私はCHILEという学生ボランティア団体の一員として、ACEF、BDPを通してバングラデシュの教育支援を行っています。このスタディツアーに参加したのも、支援国の実際の姿を知りたい、現地の声を聞いてみたい、そして普段とは違う視点からバングラデシュを見てみたいという思いからでした。様々な事情によりCHILEのスタディツアーではなく、このACEFのスタディツアーに参加させていただくことになり、本来の目的を達成できるのかなどの不安もあったけれど、これまでとは異なる見方をできるのではないかという期待の方が上回っていました。

バングラデシュで目にする風景はどれも新鮮なのに、なぜか違和感がなく、写真で見ていた世界に自分が吸い込まれたような、そんな不思議な感覚でした。この２週間のスタディツアーでは、同じものを見たり、聞いたりしていても感じ方はそれぞれだということを日々感じさせられ、さらに一つのことに対しての様々な考えを共有することで、一日の中で起きたことをあらゆる視点から見ることができました。また、これまではあまり知る機会のなかったバングラデシュ歴史や宗教についても目を向けることができました。このように日々、視野を広げて過ごすことができ、子どもたちとの接し方も真剣に考え、この２週間がより実のあるものになったのは、高校生から社会人までいるメンバーと毎日行うシェアリングがあったからこそのことだと感じています。

日本で活動を続けていく中で、本当にこの活動は必要とされているのか、そんなことを考える時もあります。しかし、抱いていた疑問は現地の子どもたちの眩しい笑顔によって薄れていきました。このスタディツアーに参加し、プーバイルやネトロコナに滞在する中で、きらきらした目で授業に取り組む子どもたち、「子どもたちが本当に楽しそうに学校に通っていることが嬉しい。」と笑顔で話してくれたお母さん方、工夫を凝らして熱心に教える先生方、教育を通してバングラデシュをよりよくしていきたい奮闘するBDPスタッフのみなさんを目の当たりにし、その姿に感銘を受けました。そして、このように多くの方々と接することで教育現場において必要とされているものは今も多々あるため、私たちにもまだやるべきことがあるのだと知ったり、中心部とその他の農村部との格差を少しでも緩和していく必要があるのではないかというこれからの課題を見つけたりということに繋がりました。２週間で得たことを多くの人へ伝え、今後はバングラデシュで出会った人たちのことを思い浮かべながら活動に力を注いでいきたいと思います。

最後にこのスタディツアーに関わる全てのみなさまに感謝をしたいと思います。ありがとうございました。

私ができること

共愛学園高校２年　　福田悠夏

私は依然からずっと発展途上国に興味があり、将来は発展途上国でその国や人々を豊かにするために働きたいと思っていました。 そこでACEFの募集を見つけ、チャンスだと思い応募しました。 正直バングラデシュのことはほとんど何も知らない状態でみんな大変な暮らしをしていて辛いんだろうなとイメージしていました。 しかし初めて見た都市のダッカは全てが驚きと衝撃でいっぱいでした。 人口は多いと聞いていましたが、どこを見ても人であふれていて車もたくさん通っていて、独特なにおいとじめっとした熱気とゴミが汚いなというのが最初の印象でした。 しかし宿舎に近づくにつれ、人がだんだん減り静かになっていき、少し移動すると全然景色も変わっていくんだなと感じました。

それから宿舎で、初めは慣れなかったみんなと集団生活をしながら、ネトロコナへ行ったり、買い物に行ったり、近所の子どもたちと仲良くなったり博物館に行ったり、BDPスクールを訪問したりと、毎日が充実していて、本当に一日一日が大切で、楽しい想いばかりが今でも毎日思い出されます。 それと同様私は今回のスタディーツアーでたくさんのことを学びました。 まず先進国はただ支援するばかりではダメなんだということです。 私はずっと、「なんでもっと日本は食べ物やお金を送らないんだ、ご飯が食べられず苦しい生活をしている人々にもっと食べ物を上げなくてはいけない」と思っていました。でも与えるだけでは彼らのためになりません。私たちが本当にあげなくてはいけないのは、畑をうまく耕すための方法、商売をするための方法、何か物を作る技術、ごみや衛生・食に関する教育、何と言っても学校に通う事の大切さや教育の重要さなのではないかと考えさせられました。日本人がやってくれるではなく、ベンガル人が自分たちでやったのだと、自分たちで国を良くしていくんだという意思を持たなくてはいけないんだと、今回すごく感じました。

BDPスクールも地域に根付いて、いろいろな人に協力を得て学校を建て、それを持続していくことが大切で難しいと言っていました。 世の中にはこうやって毎日苦労してバングラのために子どもたちのために頑張っている人たちがいて、自分は一体何ができるんだろうと毎日考えてしまった。 結局答えは見つからなくて、結局自分は何もできなくて、目の前にいる、物乞いの人もまぶしい笑顔で笑っている子どもたちも誰一人自分の力で救うことができないって分かって改めて自分の無力さに気付きました。 自分の考えは甘いんだな、自分はまだまだ子どもなんだと気付かされました。 もう元の生活に戻ってバングラでの生活が夢の表に感じます。 こんなにも違う世界で私はまだ生きていきます。 バングラでの2週間は一生忘れないです。

まだ高校生の私には何もできないです。 でもこれから今以上にたくさんたくさん勉強して、絶対またバングラデシュに帰りたいです。 地域の人々の優しさやスタッフの方々の優しさを忘れず、将来恩返しがしたいです。 勇気や元気をたくさんもらったネトロコナの子どもたちや先生や、またみんなに会いたいです。

最後に、バングラデシュに限らず、全ての人が苦しみや悲しみから解放され、皆が平和に幸せになれる世界が訪れることを祈っています。 そして私自身それに貢献できるよう頑張ります。
2週間、たくさん迷惑をかけてしまうこともありました。 本当にすいません！2週間有難うございます。

本当の豊かさ－The most important thing in life

女子聖学院高等学校高校1年　川嶋乃笑

今回このスタディーツアーに参加して、沢山のことを経験させて頂きました。その中で様々なことを感じ、考えさせられました。中でも特に深く考えさせられたことがあります。それは、本当の豊かさとは何かです。

少し前までバングラデシュは世界最貧国と言われていました。今でもアジアの中ではそうかもしれません。最初は確かにとても不便だと思いました。しかしだんだんそうは思わなくなりました。逆に日本人の方が、ある面では、貧しいのではないかとも考えるようになりました。確かにバングラデシュではすぐに停電し、お湯は出ず、トイレも水洗ではなく、日本には普通にあるものがバングラデシュにはありません。けれども、子どもを BDP の小学校に通わせているお母さんが「今困っていることは無いか」と聞かれ、「子どもを学校に通わせることができて、子どもがとても嬉しそうだから無いわ」と答えるのを聞いて、ベンガル人には家族の温かみ、本当の勉強の楽しさ、もっと勉強したいと思う意欲、周りの人を思いやり皆で協力しようとする気持ちを感じました。これらのことは、お金や電気など目に見える物よりもずっともっと大事だと思います。それがベンガルの人にはありました。

日本ではどうでしょう。仕事ばかりで家族とゆっくり過ごす時間が取れない。LINE や Twitter をやりすぎて、勉強がはかどらなかったり、相手の顔を見て話す機会が少ない。こうなってしまったのはきっと日本に物が沢山ありふれてしまったからではないでしょうか。物が溢れているから人として大事なことを見失ってしまう。これではどんなにお金があっても意味がないと思います。けれども、バングラデシュの人々は物がないと様々なところで苦労しているはずです。しかし、そこで周りの人々と支え合っていくことで、絆がうまれ、近所のひと、村全体が大事な人となります。これはお金では買えない素晴らしいことです。私もバングラデシュで生活したことによって日本では得られないような人と人との繋がりを得ることができたと信じています。そして、バングラデシュには日本のようなお金の豊かさはないかもしれないけれど、もっと大切な「豊かさ」があると感じました。

今、バングラデシュはとても速いスピードで発展しています。そこで、裕福な人だけがどんどん先に進み、残りの人たちを置いてきぼりにするのではなく、国民全体が協力して国を良くしていくことを願います。また、1 度でもお金を沢山得ることに夢中になってしまうと、家族と過ごす時間、周りを思いやる気持ちなど、お金では買えない大事なことを忘れてしまい、生活の中からそういったことが少しずつ消えていってしまいます。そして 1 度無くしてしまうとその大事さに気付き、取り戻すのはとても難しいです。だから、バングラデシュの人たちが今持っているものが日本を含めた先進国からすればどれだけ羨ましいものなのか、世界中でどれほどの人がその価値を忘れてしまっているのかをバングラデシュの人たちに知ってもらいたいです。そして、今の日本と同じぐらいの経済力を持っても、その価値を分かっている人で溢れている国であってほしいです。

この 2 週間を通じてもっとバングラデシュのことを知りたいと思いました。これで終わりにするのではなく、これからもずっとバングラデシュと関わり続け、少しでもバングラデシュの役に立てればいいなと思います。

また、このような充実した 2 週間を過ごせたのは、いつも私たちが安心して過ごせるように優しく気づかい見守ってくださった BDP のスタッフの方々、慣れない私たちのために色々説明してくださった JICA の方々、困ったときにいつも助けてくれたスタツアの参加者のみんな、いつも笑顔で宿舎に遊びに来てくれたり学校に迎えてくださった現地の方々のおかげです♥

バングラの子どもたちにまた会ったときに恥ずかしくないような自分になって絶対にまたバングラに来たいです！

本当にありがとうございました。オネークドンノバット♡

スタディーツアーに参加して

東洋英和女学院高等部１年　　森田智子

バングラデシュでの２週間は、本当に楽しくて夢のような毎日でした。また、学ぶこと、考えさせられること、驚くことの多いとても充実した時となりました。

私はこのスタディーツアーでいくつもの学校を訪問させていただきました。一つの長机に肩を寄せ合い熱心に勉強している子どもたち、その眼は輝いて見えました。　日本では、　勉強はあまり好きではなく、先生や親に追われて仕方なく勉強している、という子どもたちもいるのではないかと思います。しかしバングラデシュの子どもたちに「勉強するの好き？」と訊くとみんな揃って「好き！」と答えてくれました。
それを聞いて私は何とも言えない複雑な気持ちになりました。バングラデシュでは日本のように十分に教育を受けることができず、大学まで行くことが出来る子どもは本の一握りしかいません。しかし、勉強に対する熱意は日本の子ども以上にあるように思えたのです。

もう一つ、子どもたちへの質問の答えの中で印象的なものがあります。それは将来の夢についてでした。子どもたちは、医者、先生、軍人、警察官、エンジニア、パイロットなどと自分の夢を大きな声で私たちに教えてくれました。その時私は、みんな大きな夢があってすてきだなと思って聞いていました。

その話をシェアリングでみんなと話していると、ACEF のスタッフさんがこんなことを仰いました。「夢を持っている子どもたちのうち何人がその夢をか叶えることができるだろうか。日本では夢は努力すれば叶えられるが、バングラデシュではそうではないのだ。」
私はそれを聞いてはっとさせられました。私は今まで恵まれた環境で生まれ育ち、なに不自由なく暮らしてきました。しかしそのことをあたりまえだと思い、感謝することを忘れ、逆に少しのことで不満を言ってきました。そんな自分がこの時とても恥ずかしくなりました。私たちは努力次第で自分の夢に近づくことができます。しかし、バングラデシュの子どもは夢があっても自分の努力だけではどうにもなりません。また職業も限られた中から選択しなくてはならないのです。このとき私はこの国の厳しい現実を見た気がしました。

私はこのスタディーツアーに参加する前は、バングラデシュの子どもたちの為に私ができることは何なのかを見つけてこようと考えていました。しかし実際に行ってみると、私がバングラデシュの子どもたちに何かを与えるというよりも、それ以上に彼らから学ぶことのほうが多かったように感じています。

また ACEF や BDP の方々からもとても多くのことを学ばせていただきました。　私はこれまで ACEF や BDP のお仕事は、学校を建てることだと理解していました。しかし現地へ行ってみて、バングラデシュの人々に将来への希望やチャンスも与えているのだということを知りました。

バングラデシュで素敵な出会いがたくさんあったので、その方々に会いにぜひまた戻ってきたいを思います。

最後になりましたが、ACEF や BDP のスタッフのみなさん、一緒に過ごしたメンバー、日本から私たちのことを気遣ってくれた家族、このツアーに関わってくださったすべての方に感謝の気持ちでいっぱいです！　ドンノバット♡

先進国と発展途上国

フェリス女学院高等学校２年　　佐々木　まゆ

二週間のスタディツアーで、たくさんのBDP小学校を訪問し、一番強く思ったのは、バングラデシュの子どもたちを日本の設備の整った学校で学ばせてあげたい、という事でした。

今回、バングラデシュという発展途上国に行き、紙面上ではわからない、「生の」現実を見ることが出来ました。　ダッカのゴミのにおい、混雑した道路に響くクラクションの音、市場の賑わい、５０センチ先を闊歩する野犬、牛、ヤギ、町に溢れる人、人、人。　これらを見ずにわかった気になっても、本当の理解とはいえないでしょう。

バングラデシュの人々は、必要最低限の物で生活しています。日本の物に囲まれた生活とは正反対です。　しかしそこには、日本が忘れかけているものもたくさん見られました。　まず、家族を含む人々のつながりの強さです。　家族をとても大事にし、子どもは村全体で見守ります。　また、勉強する時の子どもたちの熱心さと輝く笑顔です。　みんな心から楽しそうに勉強していました。　日本の子どもたち（私自身含め）勉強＝楽しいことと考えられているでしょうか？

ツアー前の私は、私たち先進国が発展途上国をどう支援すればよいか、見ようと思っていました。　しかし実際に行ってわかったのは、私たちも彼らから学ぶべきことがあるということです。　お互いに学びあうことで、各々の欠けている部分を埋めていくことが必要なのです。

帰国して、すっかり日本の生活に馴染んでしまいました。　しかし実際に経験したことは簡単には忘れません。　私が見てきたことをたくさんの人に伝え、みんなに興味を持ってもらいたいと思います。　そしてこれからも私自身支援にかかわっていきたいです。

このスタディツアーに誘ってくださった、私たちの安全を第一に考えてくださったＡＣＥＦの方々、温かく迎えてくださったＢＤＰの方々そして二週間共に楽しく過ごしたツアーメンバーに感謝します。　フェリスで初めての参加者となりましたが、今後もこの有意義なツアーに参加する人がいることを願います。

幸せの価値観

横須賀学院高等学校１年　宮森　海帆

バングラデシュから帰国して、日本の生活にまた戻ってきました。ですがふとした時にバングラデシュでの生活を思い出します。それは、食事をしている時や車に乗っている時、お風呂に入っている時であったりしますが、特によく思い出す時は、「幸せだ。」と感じるときです。

「日本はバングラデシュより幸せであるか。」
BDP スタッフのアルバートさんからの質問を聞き、チームメンバーでシェアリングをした時、「物を与えられることで得る幸せ」が多いのではないかという意見が出ました。
バングラデシュの人の幸せと感じるときは「家族で一緒に過ごす時」と答える人が多かったのですが、私が実際幸せだと感じることが多かったのは好きな食べ物を食べたときや欲しかったものを手に入れたときなど物を得ることで感じる幸せが多く、とても衝撃を受けました。
私は日本に帰ってきてから「物を与えられることで得る幸せは、人との関わりで得る幸せよりも幸せなのか。」と考えることが増えました。この答えはまだ見つかっていません」が、このスタディーツアーで幸せに対する見方が変わりました。

また、BDP スクールの子供たちは、花をプレゼントして歓迎してくれたり、
ネトロコナのスタッフは、食事をよそってくれたり、さりげなく椅子を持ってきてくれたり、どちらもおもてなしの心を強く感じ、嬉しかったです。
私はこれから先このスタディーツアーで感じたネトロコナ、プーバイルでの BDP スタッフの心づかいやバングラデシュの人々の優しさ、子供たちの笑顔を忘れることはないと思います。
バングラデシュにはこれから発展させなければならないところはたくさんありますが、日本にはない良さがあり、その良さはなくさずに発展していって欲しいです。
そのために私にできることを探し、少しでも協力したいと思います。

お世話になった BDP スタッフの方々、ACEF の方々、チームメンバーのみんな、
ありがとうございました！！

また、大学生になったら参加したいと思います。
アバールデカホベ！！！

子どもたちの笑顔を見て

中村　綾乃

バ ングラデシュの市場に行ったときや街の風景を見ていると、とても不思議な気持ちになりました。民族衣装に身を包みながら道を行きかう人々、大きな音でクラ クションをならしながら走る車、その間を走るリキシャ、ベンガル語の看板も何もかもが、私にはとても新鮮でした。あまりにも「日常」とかけ離れた光景を前 に、映画の中に入り込んでしまったのかなと錯覚を起こしてしまいそうなくらいです。しかし、その地域独特の雰囲気に包まれるにつれ、自分は今ここで生きて いるんだ！という実感がわくのと同時に、初めて見るものへの興味や、自分自身の目で実際に見て感じられるということへの喜びが心の底から湧きあがるのを感 じました。

私はAチームのメンバーとしてネトロコナへ行きました。井戸での生活や、水田が広大な地に広がっている風景、牛やヤギが道のあちこちにいるのはとても驚きです。

そ こでは子どもと関わる機会がたくさんありました。到着した日、私は宿舎の前に遊びに来た子たちとカメラで写真を撮って遊んでいました。ある男の子にカメラ を渡したまま、私が目を離してほかの子と遊んでいる間に、男の子がカメラを持って家に帰ってしまったのです。BDPスタッフの方や村の方のおかげでカメラ 自体は戻ってきましたが、自分の行動のせいでたくさんの人を傷つけ迷惑をかけてしまったという事実は変わりません。ここに来て、個人の行動がどれほど周り の人へ影響するのかということや、自分自身でしっかりと先のことを考えて行動することの大切さというものを受け止めました。

そ して、私がバングラデシュで一番印象に残っているのは子どもたちの笑顔と一生懸命に学ぶ姿です。レンガでできた学校、トタンでできた学校、スラムにある学 校、机がなく地面で授業をしている学校など、たくさんの学校を訪問しましたが、どの学校の子どもたちからも学べる喜び、授業に対する熱意が伝わってきま す。学べる環境があるにもかかわらず、それを怠ってきた自分が恥ずかしく思えました。また、バングラデシュの子どもたちが勉強したり笑顔で過ごせたりでき る環境づくりに自分も何かの形で協力したいと強く思うようになりました。そのためにも、これからはバングラデシュの子どもたちに負けないくらい一生懸命勉 強したいです。

Bangladesh ☆

フェリス女学院中学校高等学校教員　徳田　有希子

今回は前回(2007年)に洪水のために行けなかった農村(Jamalpur)に行けた。バングラの新たな魅力がそこにはあった。のどかな自然に抱かれて、のびのびと、でもパワフルに、いつも全力で私たちのことを喜んでくれる子どもたち！シンティ、ビッティ、シャクリカ…一緒に思いっきりスキップしたり、指相撲をしたり、シャプラ(国の花)でネックレスを作ってくれたり…チームの高校生メンバーの、子どもとの距離の近さに便乗して本当にたくさんの子どもたちに出会えた。本来子どもって、あんなに生命力がみなぎっているものなのかと思うと感動した。また、私たちがただそこにいるというだけであれ程喜んでくれる存在にもまた感動した。

スタッフも素晴らしく、とても愛情深く、思慮深く、心の美しい方々だった。印象に残ったのは敬虔なムスリムであるバシェットさんとドライバーでクリスチャンであるステファンさん、メンバーのしんちゃんと4人で互いの宗教について語り合ったこと。少し踏み込んで互いに大切にしているものについて自然に語り合えた経験が私にとっては意義深かった。「私たちは同じ神様を信じている。信じ方が違うだけ。」その言葉が嬉しかった。授業でもイスラムのお祈りを習っていたが、他の宗教の祈り方についても政府は教科書の中で教えるようにしているし、バングラでは他宗教の祝日をも共有しているとのこと。ファルークさんの言葉が重なる。「私はイスラム教徒である前に人間だ。ベンガル人である前にユニバーサル市民だ。」人が違いを超えて互いに認め合うことの可能性を見出せて、素直に嬉しかった。

ジャマルで乗ったボートの上で、バシェットさんの歌声を聴き、雄大な景色を眺めながら少し感傷的になってしまった。「帰りたくない！あの忙しい生活に戻りたくない！」ファルークさんの言葉にもあったが、日本では選択肢が多すぎて悩みが多すぎる。贅沢な悩みだけど、色々と複雑な生活を送る上での悩みは私にとっては深刻だ。でも、本当に大切なことに集中していこう。悩みの内容も、買う物も、本当に大切なものかどうか、ちゃんと選べるようになろう。

何人かのプーバイルスタッフから独立戦争の話を聞けた。まだまだリアルな戦争の記憶。彼らの、建国の歴史に対して抱いている熱い思いを、前より少し理解できた気がした。お金でも領土でも宗教でもなく、言語のために戦ったこの国の歴史をもっと深く学びたい。そしてもっとベンガル人の気持ちを理解したいと思った。

生活の不便さの中で自らの小ささを感じ、その中で聖書のみ言葉に謙虚に触れられるST。世代が異なりすぎて最初は無理、と思っていても、毎日繰り返すシェアリングの中で、若いメンバーが大人から、そして大人が若いメンバーから刺激を受けられるST。「人が学び、成長する場」はやはり素晴らしい。STのメンバー同士の中でも、もちろん訪問した学校でもそう感じた。

スラムへ行った時、教育は命を守るものだと強く感じた。どうか、バングラデシュの全ての子どもたちが等しく教育を受けられますように。そして、持っている力を伸ばし、それぞれの豊かさがよりよく用いられる環境が与えられますように。全ての人が人らしく生きられますように。倒れている友人のために、私は私にできることを継続したいと強く思った。

Bangladeshと聞くと熱い気持ちで思い出す多くの友人たちの姿を想像しながら！

バングラデシュの２週間

田尻真介

８月６日から１８日まで，私はバングラデシュにいました。ACEFという団体が主催するスタディーツアーに参加したのでした。このツアーは，現地のNGO法人（BDP：Basic Development Partners）が設立・運営している小学校を訪問し，そこの生徒たちと交流するというものです。初めてバングラデシュを訪問し，見ること聞くことの全てが初めての私にとって，今回のツアーは，新鮮で衝撃的な日々の連続でした。多くの未知の体験をとおしていろいろなことを考えさせられたこの2週間を，正確に言葉で表現して伝えるのは不可能です。きっと，みなさん自身が自分の目と耳でバングラデシュという国を知ること以外に，私が今みなさんにお伝えしたいと思っていることを知る方法はないでしょう。

初日。到着したダッカ空港から外に出た瞬間，ムッとする湿度の高さに参りました。果たして2週間，ここで生き延びることが出来るだろうか，それとも少しはここの気候に慣れることができるだろうか，そう思いました。迎えに来てくれたBDPのスタッフの車に乗り込み，空港から延びる幹線道路を北に向かう間，目に飛び込んできたのは，確かにどこかで目にしていた『最貧国』バングラデシュの，雑多な車と人々でごった返す猥雑な風景ではあったのですが，それに，埃っぽくムッとした空気と一種独特なにおいがマッチして，私は，確かにそれが現実の風景であることを悟るのでした。信号のない交差点で，我先に先を争う車に囲まれて進めなくなったとき，片足の萎えた物乞いが近寄って来て車窓にへばりつき，まさに憐れみを乞う眼差しで手を伸ばしてきたとき思考は停止し，ただ「ナー」と言うばかりでした。

それからの2週間の体験は，すべてが初めてのことばかりで，思い出深い出来事もたくさんありますが，その一つ一つを振り返るのはやめて，一つのことだけをお話ししたいと思います。今回のスタディーツアーで私はジャマルプールに行きました。ジャマルプールのBDPオフィスのとなりには庭続きに家が建っていて，そこにはBDPに土地を貸しているミルトンさん一家が住んでいます。彼は近くの大学で歴史を教えている教授ですが，今回は，このミルトンさんのおとうさんとの思い出話をしたいと思います。彼のおとうさんは，近くの高校で先生をしていましたが，定年退職をして悠々自適の生活を送っていました。白いひげを蓄え，ぎょろりとした目が印象的な七十すぎのおじいさんです。いつも頭にトゥピをかぶっていました。また，おじいさんが女の人と話をするのを見たことがありません。それから，ツアーメンバーの女の子と写真に写ろうともしませんでした。ぼくは敬虔なイスラム教徒なのだろうと思い，最初は近寄りがたく感じていました。ときどき庭に出て来ては，近所の子供たちを一喝していて，怖そうな印象もありました。ただ，上半身はランニングシャツという，割とラフなかっこうで庭に出てくるので，あいさつを交わすうちに，お互い片言の英語ではありますが，一言二言，話をするようになりました。ある日，このおじいさんが割と遅い時間に庭に出てきたので，BDPのスタッフが笑いながら何か言いました。おそらくからかって「今まで寝ていたのか」と聞いたのだと思います。おじいさんも何か答えていましたが，もちろんベンガル語なので私には分かりません。するとおじいさんがぼくを手招きして，英語でこんな風なことを言ったと思います。「私は寝ていたんじゃないんだよ。私はお祈りをしていたんだよ。私は教師だったが，７，８年前に退職して今は好きなように生きている。 寝たいときに寝て，起きたいときにおき，食べたいときに食べ，休みたいときに休む。しかし，この顔はいつも神さまの方を向いている。私にとってはすべてがお祈りなんだよ。」そして，目の前に広がっている田園風景を眺めるようにしてこう続けました。「すべてのものは神さまが造った。すべて神さまのものだ。私のものなど一つもない。私はメッカにも行った。もうこの世に思い残すことは何もない。神さまから，いつにこっちに来いと言われても，よろこんで行くよ。」そう言って笑った顔は，本当に子供のようでした。

ーありがとう、バングラデシュ！　そしてバングラデシュの将来に思いを馳せますー

日本ＩＢＭ　ソフトウエア・エンジニア　川嶋敦子

ACEF スタッフからは、B5 サイズに 1 枚相当のレポートと言われました。無理です！　バングラデシュでの 2 週間が B5 サイズに収まるはずがありません！　それほど多くの体験がありました。そしてこれらの体験は何度も何度も甦っては、今も私に多くのことを考えさせ続けています。

そんなバングラデシュですが、この体験を周囲の友人・知人に話しても理解してもらえないもどかしさも感じます。でも自分自身も“清水の舞台”を飛び降りる覚悟で参加を決めました。理解できない周囲の人たちは、参加前の私と同じなのです。これが日本とバングラデシュの間にある現実的な距離感なのでしょう。

けれども理解してくれる人もいました。まず夫です。アフリカに学校を建てるプロジェクトに携わっており、頻繁にアフリカ諸国に行っている夫はしっかり受け止めてくれました。また私も、夫が今まで語っていた開発途上の国々での出来事の意味を、まるでジグソーパズルがピタッとはまるかのように理解できました。

そして娘です。このスタディツアーに一緒に参加しました。でもグループも行き先の田舎も別でした（幸いにも！）。帰国してからも、娘との間では “おしゅびだない”（= 問題ない）を使い続けています。私はこの旅を“子育ての集大成”にしようと思っていました。この 2 週間を通して私は、参加したすべての高校生・大学生が、“一本筋の通った人になる！”と確信しました。ですから子どもの自立に不安のある方、あるいは巣立つ我が子にまだ何か伝えきれていないと思う方は、一緒に参加してみることをお奨めします。

そして理解してくれたもう一人は、不思議にも仕事上のイギリス人の上司でした。モノを持っている私たちは、“もっともっと…”という際限ない欲望とそれを保持することに人生の大半を費やしている。モノの無い時代、私たちはもっと自由ではなかったのか…ということを話しました。現代のテクノロジーを手招きで喜ぶことを善しとせず、警鐘を鳴らす者は海を越えたヨーロッパにもいたのです。

私は英語がさほど得意ではありませんが、高校生・大学生よりは少し出来たので、バングラデシュでは簡単な通訳を頼まれることがありました。これはとても楽しい時間でした。まず高校生や大学生が考えていることを直に知ることができました。また高校生・大学生に真摯に答える BDP スタッフの話を聞くことができました。日本の未来を背負う高校生・大学生、“捨てたもんじゃないぞ！”と心からエールを送る気持ちになりました。

スタディツアーでは、スラム街の学校と付近の家庭を訪問する機会がありました。訪問する前は、最貧国の最貧層であるスラムの人たちを悲壮に思う気持ちが先行していました。けれども悲壮感は微塵も感じられませんでした。むしろ彼らの中の“貧しいなりにも人としての尊厳”がしっかり伝わってくるのを感じました。これはきっと BDP が続けてきた“教育”によって培われたものであり、“教育”が彼らに希望と誇りを与えていると思いました。今の日本では“教育”は与えられるのが当たり前になっていて、それが誰にでも与えられていなかった時代があったことを忘れていました。バングラデシュに行き、与えられていなかったところに“教育”が与えられ、それが社会を作る原動力となっていることを目の当たりにし、教育の重要性をあらためて実感しました。

最後に、私の中に鮮明に残る 2 つの対比的なイメージを記します。一つは、爆走しているリキシャやバス、その車輌の中をすり抜けるように手を差し出す物乞い、そしていたるところに消化不全を起こして山積みされたプラスチックのゴミをかかえた都市の様相でした。そしてもう一つのイメージは、豊かなベンガルの田園風景です。牛やヤギ、鶏、犬、ホタルにいたるまで、すべての動物が共存し、大人から子どもまで一列に並んで田植えをしている姿は、私たちの心の原風景とも言えるものでした。

国をあげて 2020 年までに “デジタル・バングラデシュ”を目指すのだということを現地の人々から何度も聞きました。豊かに自然と共存している今のバングラデシュの田園風景を代償に、それを実現してしまうことのないように祈るばかりです。このことを悶々と考えさせられてしまったのは、スタディツアーの中で私だけではなかったようです。どうか私たちたちの思いが届きますように。

思い込みと現実

前田　七海

学校の掲示板でバングラデシュスタディーツアーの広告を目にした瞬間、なぜか参加しないという選択肢は一欠けらもなかった。申し込みを済ませた後、よくよく考えるとバングラデシュについてあまり知らない自分がいた。調べていくうちに、バングラデシュという国は世界の中でも貧困であり、イメージもあまりよくないという事が分かった。少し不安な気持ちを抱えながら出発の日を迎えた。

ダッカの空港に足を踏み入れたと同時に、今までに感じたことのない湿気と何とも言えないにおいに包まれた。空港の柵越しからは、私たちを凝視しているたくさんの人々。本当に二週間ここでやっていけるのか、さらに不安になった。しかし、帰国する当日になると涙なしではいられなかった。

バングラデシュに行って本当に痛感したことは、メディアや人の言葉に流されすぎてはいけないということである。バングラデシュについての資料やネットを通して、あまりいいイメージを持つことはできなかった。しかし実際に訪れると、確かに問題はたくさんあるが、何よりも現地の方々、特にBDPのスタッフがとても親切であり私の中で悪いイメージは消え去った。日を追うにつれて、バングラデシュのいいところがたくさん見えるようになった。行く前からメディアだけの情報を過信していた自分が恥ずかしくなった。メディアからの情報は、あくまで参考程度にし、できるのであれば自分で実際に行動するべきだと思う。それと同時に、自分をしっかりもつことも大切だと思った。

今回このスタディーツアーに参加して、自分を見直す良いきっかけになった。「貧しい＝かわいそう」という方程式を勝手に自分の中で作りあげ思い込んでいたが、実際はそんな方程式は成り立たなかった。本当に貧しいのは日本ではないかと思うようにもなった。そして、いかに自分が欲深く、上からになっていたのかも痛いほど実感した。自分の知らない世界を知ることは、自分を知ることにも繋がる。そしてなにより、経験に勝るものはないと強く感じた。現地で感じた溢れるほどの愛は、一生忘れられない。

２０１４年　夏　スタディーツアー　感想文

新倉早紀

バングラデシュから帰国してから日本はとても恵まれていると思います。　整備されている道、安心して飲める冷たい水、温かいお風呂、、、、など。発展途上国と先進国の差を感じました。

たまに考えることがあります。バングラデシュが日本のように恵まれる国になったらバングラデシュの人々はどういう反応をするのかなと。きっと、貧しい生活から抜け出すことが出来て、幸せかもしれません。けれど、この日本にはバングラデシュのような活気や優しさが足りないと感じます。そんな生活にバングラデシュの人々は飽きてしまうと私は思います。私はバングラデシュの良いところは、たくさんの自然に囲まれた心豊かな人々がたくさんいるところだと思っています。

バングラデシュに２週間滞在して、人生観が変わったような気がします。しかし、変わったような気がしているだけかもしれません。なぜならこの２週間で感じたこと、思ったこと、考えたこと、をこれからの人生の中で生かしていかなければならないと思うからです。今の私は少しだけ視野が広がっただけ。この先、日本にいる間でどれだけバングラデシュやその他の発展途上国のことを想えるかが重要だと感じます。

今、日本で不自由なく過ごしている私たちが「自分たちは幸せ、日本は幸せだな」と思ってしまうのは違います。そう思っている人が多くいるならば、世界に平和が来る日は訪れないでしょう。したがって、恵まれている、幸せ、豊かだ、様々なことを感じたときに相手のことをどれだけ想うことができるかどうかが、世界が平和になる第一歩であるのかなとこのスタディーツアーを通して感じました。

私はバングラデシュの産業や教育の発展を望むけれど、人の心が変わってしまうことを望みません。Digital バングラデシュだけにはなってほしくないです。バングラデシュの人々の暖かい優しい心が私は大好きです。

いつか私がもう一度バングラデシュを訪れるときも暖かい心で迎えてくれると信じています。今回スタディーツアーに参加できて本当に素晴らしい経験が出来ました。一緒に行ったメンバーはもちろん、関わってくださった方すべてに感謝します。ありがとうございました。

No Bangladesh no LIFE

田草川　梨乃

私は愛知の大学生だ。サークルでバングラデシュにBDP、ACEFを通して小学校を建設するという活動をしている。
今年はサークルのスタディーツアーに参加することができなかったので
ACEFのスタツアに参加した。

今回のスタツアは、高校生ばかりの参加者で最初はとても不安ばかりだった。しかし考え方がしっかりした人たちばかりでとても勉強になった。
CHILEのスタツアじゃ学べないバングラの歴史、宗教、人柄の良さ、自然の豊かさ・・・。
もう全てが新鮮で去年とは全く違う感情を持った。
語学力が全くないのに優しく深い話をしてくれたBDPのスタッフには、本当に本当に感謝。
みんな素敵な考え方で、全員本当に尊敬できるなと思った。中でもファルークさんとはたくさんの話をした。
ファルークさんは何度も何度も、「この楽しかった素敵な思い出を、日本のみんなに伝えて、バングラ大使になって欲しい」って言っていた。
この言葉がすごく心に残っていて、自分のやるべきことは、バングラのことをみんなに伝えることだと強く思った。

去年よりもっともっともっともっとバングラデシュが大好きになった。こんな素敵な国に出会えたことに感謝。2回もバングラに行けたことに感謝。こんなに尊敬できるなと思える人に出会えたことに感謝。全てのことに感謝。

大好きなバングラデシュのために子ども達のために絶対恩返しをする。
CHILEを引退しても絶対バングラデシュと関わって行きたい。
バングラデシュが大好き！

ＡＣＥＦスタディー・ツアー　感想文

竹田拓哉

今回このスタディー・ツアーに参加したことによって、バングラデシュについてより深く知ることができました。僕はＣＨＩＬＥというバングラデシュに小学校を建てている団体に所属していて、バングラデシュについてインターネットを使って調べたり、バングラデシュに行ったことのある先輩方に話を聞いて、おそらくこんな国なのだろうなというイメージを持っていました。しかし実際バングラデシュに行ってみると“イメージのバングラデシュ”と“実際のバングラデシュ”のギャップに大きな衝撃を受けました。貧困国というだけで可哀想とか、ネガティブな先入観を持っていたことを反省しなくてはいけないなと感じました。

バングラデシュの人々は確かにお金をあまり持ってないのかもしれません。でも、暖かい心をもっていてみんな笑顔で生活していました。きっと日本人より幸せなのだろうなと素直に思わされました。

大学生という時期にバングラデシュに行くことができて本当に良かったと思います。2週間ありがとうございました。

話す言葉も肌の色も文化も違う、でもそんなことは関係ない！

大事なのは心

東洋英和女学院１年　　和里田　美結

何不自由なく生活する日々、そしてそれを当たり前だと思っている自分。 そんな自分に刺激を与えたい！　そして視野を広げたい！と思いこのスタディツアーに参加した。

“バングラデシュ”この土地で過ごした二週間は私にとって」すごく充実した時間だった。 同じ地球という星に生きているのにも関わらず、日本とは全く違う場所だった。 クラクションが鳴り響く道路、停電することが当たり前の電気、そして道に広がるごみの山･･･。 すべての事が私に衝撃を与えた。 しかし、それと同時に、バングラデシュの人々の優しさを知ることが出来た。 町で手を振ればみんなが手を振り返してくれる。 感受性豊かで何にでも好奇心を示してくれる子どもたち、快く迎え入れてくれる BDP スタッフの方々　私はそんなバングラデシュの人々が大好きになった。

そして、過ごしていくうちに、現地の人と同じ目線で向き合うことで心が通じ合うようになった。近所の子どもたちには、「みゆみゆみゆ―――緒に遊ぼう！」という様に呼びかけられるようになり、言葉は通じないけれどお互い本気で心が通じ合っているのがわかった。 また、一緒にジャマルプールへ行ったファルークさんンは「自分はガイドではなくみんなと家族になれた気がする。」と言ってくれた。 その時、私の頬に大粒の涙がこぼれた。話す言葉も違う、肌の色も違う、文化も違う、けれど思いが通じればどんな状況でさえ、家族のように心が通じ合えるものだと思った。

そして、自分が今できることを考えた結果、バングラの子どもたちを見習って勉強に励むこと、と同時に寄付できるものを集めたりしていく事ではないかと考えた。 そしてまた絶対にバングラデシュを訪れる、と心に決めた。
最後に、この機会を作ってくれた学校、家族、そして二週間共に過ごしたみんな、私たちのお世話をしてくれたBDPスタッフの方々、そして見守ってくれた神様、ドンノバット！

恵まれた環境に感謝して

外種田　日向子

お腹空いた～、何か買って食べよう。喉が乾いた、何か飲もう。暑ーい、クーラーか扇風機をつけよう。あなたは、空腹に耐える、飲み物を我慢する生活が続くとしたらどれほど耐えられるでしょうか？最近、お腹一杯に食べたものはなんですか？よほどのことがない限り、日々の生活で私達日本人は物に対して我慢をするという経験はあまりないのではないかと思います。なぜなら、日本は物に溢れているからです。

お風呂は常に水。トイレは手動で洗浄するところの方が多い。お水は井戸水。洗濯は手洗い。今、例をあげた中の一つでも「ええ！そうなの？考えられない！」と思う物があったのではないでしょうか？それはまさに恵まれている証拠だと思います。正直、私もこれらのことを理解した上でバングラデシュに行きましたが、向こうで生活して数日後に洗濯物をするのが面倒くさくなり、1日置きに洗濯したり、洗う日が不定期になりました（笑）洗濯物を始め、様々な生活面で不便さを感じましたが、その反対では、いかに自分が不便さを感じるほど楽に生きてきたかというのを考えさせられました。

学校に行けない環境の子供達が考えられないほど沢山います。義務教育がある国なんて世界から見たら、わずかなのです。教育を受けるか受けないかで人は全く異なる価値観が生まれます。私は、人間は必ず教育を受けるべきであると考えています。その理由の一つが、教育を受けることで貧困削減や経済発展に繋がるからだと思います。
環境問題など今、世界では沢山の悩みを抱えていますが、戦争を考えたのも、環境問題を深刻化してしまったのも人間なのです。それらを改善させるためにはまずは教育を受けることが繋がっているのではないのかなと思います。

私は、今までの授業を振り返ると寝ていることが多い印象があり、その分後悔が大きいです。しかし、バングラデシュの寺子屋を訪問したことをきっかけに、今後の学生生活はきちんと勉強しようと強く思いました。バングラデシュの子達が勉強に対して、一生懸命に知ろうとしている姿が今でも目に焼き付いています。
人や物に恵まれた今の環境に感謝しながら、これからの学生生活を頑張っていきたいと思います！また、このような機会を下さったACEFとBDPのスタッフの皆さん、そして快くバングラデシュに送り出してくれた家族と学校の先生、本当にありがとうございました！

「人間に本当に大事なものは？」

ACEF　井上儀子

「人間に本当に大事なものは何だと思いますか？」

BDPスタッフ、ディコさんの問いかけに私たちは頭の中でぐるぐる考えを巡らせました。愛？　信頼？　家族？　友達？　お金？　信仰？…　どれも大事に思えるし、人によって違うようにも思えます。

「では、バングラデシュの貧しい人々にとって本当に大事なものは何だと思いますか？」

同じ人間なので同じではないかと思ったところ、ディコさんは「まず食べ物、着る物、そして寝る所なのです。」と続けられました。人間が基本的に必要な衣食住です。私たちはそれらのものが当たり前のように与えられているので、もっと精神的なものに思いを巡らすことができるのでしょうか？　何もない人々にとっては今日食べるものが必要です。身体にまとう物が必要です。今夜寝るところが必要です。基本的な衣食住が整えばとりあえず生きていけます。

Cチーム9名は、インド国境近くで少数民族の暮らす山あいの、電気のない村で過ごしました。行政の届かない村で、BDPは少数民族ガロの人々とベンガル人の交わる山のふもとに小さな寺子屋小学校を12校開校し活動しています。ではなぜこの貧しい村に教育が必要なのでしょう。教育のある人とない人とではその質が違ってくるのです。ただ寝ることができれば良いだけではなく、雨を凌ぐのに屋根が必要、風を避けるのに壁が必要、光を取り入れるのに窓が必要、と家が整っていきます。さらに空気の循環が必要、健康的な生活をするには、トイレの場所、料理の場所、水の問題…とその方法を考えていくことができます。そう、教育は考える力をつけるのです。考える力がつけば生き方が変わり、その人の人生を変えて行くことができるのです。

ヘモントさんの「教育は基本的な権利です。」という言葉も、アルバートさんの「私たちは一人ひとりの子どもたちの人生を変えていくお手伝いをしているのです。」という言葉にもみなつながっていきます。BDP のお仕事は何と尊い活動なのでしょう。

BDPとACEFの歩んできた24年間、最初は「チイチイパッパの学校」と揶揄されたこともありますが、一人でも多くの子どもたちに教育の機会を与えたいとの願いが、今日まで続いてきた原動力となり、何よりもその根底にあるBDPスタッフおひとりお一人の愛によって育まれてきたものと確信いたしました。そして更に必要なものはみな神さまが与えてくださったことに感謝いたします。

「バングラデシュ・スタディツアーに参加して」

フェリス女学院中学高等学校教員　　佐藤みよ

このスタディツアーに行く前までに、私がバングラデシュに関して持っていた知識としては、洪水や飢饉が多くて世界最貧国であること、貧しい人々の自立を支援するグラミン銀行のシステムをムハマド・ユヌス氏が考案し、ノーベル平和賞を受賞した、ということぐらいでした。また以前、ある生徒がバングラデシュに関するレポートを書き、その発表を聞いて、何となく印象に残っていた国でもありました。

実際に行ってみると、遠く離れた日本で知識だけでイメージしていたのとは全く違うことを実感しました。現地の人々や子供たちの人懐っこく親愛感あふれる様子、里山の自然や家畜と共生しているのどかな風景、また首都ダッカや各地バザールでは、人ごみとリキシャと車のクラクションの騒音であふれかえる活気を、まさに体で感じました。そして、経済的な統計での位置づけである「最貧国」という代名詞は、この国の人々には意味がないように思われました。人々がそのことを全く気にしているようには見えず、むしろ自国の歴史や文化に誇りをもち、家族や村人同士が深くつながり、ささやかな日常を心豊かに暮らしているように見えました。

ツアー中、一番印象に残ったことは、BDP のスタッフから聞いた話で、「私たちはどのような子供にも、(教育の) 機会と愛を与えることが大事だと思っている」ということでした。貧しい家庭の子供でも、学校に行くことで自分の力を伸ばすことができ、将来の可能性を広げることができるということ、また、どんな子供でも愛情をもって支えていく、というスタッフの姿勢に頭が下がる思いでした。例えば、中途退学者を支援するための職業訓練のプログラムについてスタッフは、「大変な仕事だけれど皆で一緒にやっていく」と言っていました。これも退学した生徒たちの自立まで考えて、根気強く支援する愛情があってこそできることだと思いました。

バングラデシュでは、教育を受けられるか否かが生死にかかわる、ということを今回初めて知りました。自分の名前が書けないとまともな仕事につけず、リキシャ夫、ごみ集め、物乞いなどして一生、貧困生活から抜け出せません。国内の４割の子供がまだ学校に行けていないそうです。BDP スクールの生徒は、公立学校生徒より試験の成績が良く、ダッカ大学に入学した生徒もいると聞きました。まさに機会を与えられ力を伸ばした子供たちがいること、将来生きていく希望を与えるために教育が大切なことを実感しました。BDP が自国の発展のため教育を普及させ人材を育てること、また女性の地位向上のため BDP スクールでは女性の教員を採用しているということは、本当に地道ながらも尊い働きであると思いました。学校訪問で子供たちが生き生きと学んでいた姿や、女の先生たちがきびきびと指導していた姿は、印象的でずっと忘れられないでしょう。

「バングラデシュ寺子屋訪問スタディツアーを振り返って」

安達正希（Cチーム）

様々なことが思い出されるバングラデシュのスタディツアーを通して考えさせられたことは沢山あります。また、宿題として与えられた課題のようなものもあります。今は紙面の関係で主に「井戸」と「火」の二点をもとに書きたいと思います。

私の属したCチームは、インドとの国境近くのボクシガンジ地区で5日間生活をしました。水道はないため井戸水を汲んでの生活、また、電気がないため、ロウソクの火を囲んでの生活でした。そのような生活でしたので、井戸の周りには、朝に昼に夕に、夜に色々な人が集まりました。そして自然とあいさつを交わし、会話が始まりました。それだけのことが楽しいのです。携帯を片手に、という光景は見られませんでした。比較的知られたフォークダンスの「マイムマイム」を思い出しました。「マイムマイム」ですが、「マイム」は旧約聖書の言語ヘブライ語で「水」を意味します。フォークダンスは「水が出た喜び」を井戸の周りでみんなで共に踊って分かち合う様子を示し、歌詞はイザヤ書12章の言葉に基づくものだそうです。

夜になると、電気がないため、ロウソクに火をともします･･･トイレ、水浴び場もそうでした･･･。この時間帯になると現地の子どもたちと一緒ではありませんでしたが、BDPスタッフ、Cチームのメンバーと共に、火やあかりを囲みました。英語のファミリーの語源は「火」や「火を囲む」にまでさかのぼるそうです。電気のない時代、それは「食事を共にする」ことや、火に照らし出され「あれ、○○さんがいない」や、顔色を見て「なにかつらいことあったの」や、逆に「何か楽しいことあったの」との会話があったことを示しているのだと思います。そして、様々なことを共有し、分かち合ったことと思います。それが「ファミリー」の語源であるなら、「ファミリー」は血縁を越えた関係を指すことになります。･･･「神の家族」（エフェソの信徒への手紙2:19）という言葉が少し分かった気がします。

今、目をつぶると、井戸の周りで一緒に遊んだ子どもたちの笑顔が浮かんできます。そして、言葉は通じないのですが、楽しい時間を共有したこと、また、学校を訪問し教室に入った時、近くの生徒がさっと席を空けてくれ（長椅子）、共に座ったこと･･･一度や二度ではありませんでした･･･が思い出されます。

今、目をつぶると、あかりに照らし出されたBDPスタッフ皆さんお一人お一人のお顔が浮かんできます。本当にお世話になりました。バングラデシュに到着した初日の夜、プーバイルでアルバートさんと共に一つの懐中電灯のあかりを頼りに歩いたことが昨日の事のようです。

ふり返ってみると、便利な生活は、生活する上で大切なこと、生活の原点を奪ってしまったのだと思います。生活の原点、それはたとえば前に書いたように自然と会話が始まること、や、分かち合い、共有が挙げられます。「バングラデシュで心配する友を作ってきてください」とは、スタディツアーの事前学習（7月に一泊で行われた）での山口旬先生（ACEFスタディツアー委員会、横須賀学院小学校教諭）の言葉です。本当にそう思います。バングラデシュという場所で、短い時間ではありましたが、時間と場所を分かち合った方々、またお世話になった方々のことを忘れず、また友のことを覚えて祈りたいと思います。本当にありがとうございました。

世界最貧国と呼ばれる国に行って考えさせられたこと

青山学院女子短期大学　宮阪晴花

二週間、バングラデシュに行って過ごして、日本では経験できないような事をたくさん経験させていただきました。また、普段生活している中であまり考えないような事,意識しないような事を考えることが出来るとても充実した期間でした。

バングラデシュでのスタディーツアーの中で通して考えたのは幸せについてです。考えるきっかけになったのは２日目にあったBDPのオリエンテーションでアルバートさんが言った「日本はバングラデシュと比べて６０倍豊かだが、日本人はバングラデシュ人の６０倍幸せなのか。それを心の隅において考えながら過ごして欲しい」という言葉です。確かに、私はバングラデシュ人を見ていて衣服や生活の設備の貧しさは感じました。しかし、彼らに惨めさは感じませんでした。例えば、レンガの壁に空いた窓から入る限られた日光の明かりだけで真剣に生き生きと勉強する生徒たちや、靴がなくても元気にキラキラした笑顔で駆け回っている姿、クーラーのない店で熱い中ニコニコしながら商品を売るおじさん。どれも貧しいけど幸せに生活をする姿を見ていて、物が乏しい≠不幸というのは間違いだときづかされました。

またバングラデシュに居る間、BDPのスタッフにとてもお世話になりました。特に私は蚊取り線香を踏んで足を火傷してしまったり、風邪をひいて１日寝込む等迷惑をかけてしまいました。例えば、料理を作ってくれていたコックの女性たちは英語があまり通じなくても火傷していることを理解してから何十分も井戸水を足にかけてくれ、そのあともボクシガンジに一緒に行ったBDPのスタッフのディコさんは器で足冷やしている間、小１時間も傍にいてくれました。風邪を引いた時もプーバイルのコックの女性たちも汗を拭いてくれたり、温かいスープをベッドに持ってきてくれたりしてくれて、本当にバングラデシュの人の優しさを感じました。しかし、いくつか学校訪問しているとBDPスクールには制服がないのに多くの子供が空色の服を着ている理由を聞くと児童誘拐が起こった時に制服を着てないと身寄りのない(親のいない)子と思われ周囲の人が助けてくれないから親は着せたがるのだという回答をもらいました。それを聞いて、外国人の私達に温かい歓待をしてくれる一方でお金や身寄りのない子供に冷たいという一面も知り複雑な気持ちになりました。

私が得た経験や現地で感じたものは書き尽くせませんが、最後にスタディーツアーに関わった全ての人に感謝し感想文を終了しようと思います。私たちが快適に安全に生活できるように支えて下さったBDPとACEFのスタッフ皆さんや、２週間一緒に生活したツアーのメンバー、現地で出会った可愛らしい子供たち、初めは渋りながらも協力してくれた両親等々、皆さん本当にありがとうございました。

「楽しかった」だけでなく

佐々木 柊子

スタディツアーを終えて数週間が経った。バングラデシュに訪れる前と変わらない平凡な生活に戻ったが、時間の経った今でも2週間でのさまざまな出来事が思い出される。それはバングラデシュでの経験が、日本では決して得られないものばかりだったからだろう。幼い頃から日本の都会で暮らしてきた私は、あらゆる場面でカルチャーショックを受けてばかりだった。生活するのにも苦労した私たちを支え、さまざまな気づきを与えてくれたACEF、BDPのスタッフの皆さんには感謝してもしきれない。

学びの多かった2週間であったが、中でも目に焼き付いて離れないのが物乞いをしている少年の姿だ。ダッカの空港に着いた初日のことで、初めてバングラデシュという地に足を踏み入れた興奮で私たちはわくわくしていた。空港を出て宿舎に向かうため、駐車場で大きな荷物をトラックに載せている時のことだった。誰かが私の腕を軽く叩いた。誰かと思って振り返ると、そこには小さな男の子が座り込んで、こちらの方へ手を差し伸べている姿があった。その時に私は驚いて、咄嗟に後ずさりをするように逃げてしまった。少し遠くから、なぜ彼は座り込んでいたのかと疑問に思い振り返って見てみると、なんと彼には片足の膝から下がなかったのだ。

その後も私たちが駐車場を去るまで、男の子は手当たり次第にメンバーへ向かって手を差し伸べていた。これは2週間というスタディツアーの中でもかなり初めに起こった出来事であったし、それからの時間では物質的に恵まれた日本では忘れがちな「本当の幸せ」を心から実感することができた。言葉が通じなくても子どもたちと一緒に走り回るだけで笑顔になり、電気のない地域ではみんなで井戸水を汲んで洗濯をすることさえ楽しかった。みんなの洗濯物が風にはためくのを見ていると、もう少し洗おうかとも思うほどだった。

しかし、あの時に少年が私を見上げた時の表情を、瞳を忘れることはないだろう。途上国がもつ陰の部分を、私は初めて身を以って知った。ただ「楽しかった」という記憶だけではなく、さまざまな視点から問題提起する機会を与えられたことを幸せに思う。

ACEF スタディーツアーの感想

若松　いさ子

8 月 5 日から 19 日までの ACEF スタディーツアーで印象に残ったことは、ボクシガンジの生活でディコさんとお話したことです。

私が今回スタディーツアーにいく目的は、3 つありました。一つは、CHILE での活動が本当に役立っているのか、２つは、自分の大学の研究のため、3 つは、CHILE で打ち解けたいからです。この 3 つを今振り返ると、いろんなことに疑いをもっていると思われるような目的であったなと思います。確かに、いつも建物のことばかり気にしていました。

しかし、ボクシガンジの生活 3 日目にディコさんとお話をして、私の考え方は変わることができました。お話の内容は、将来どのようなことをするのか、今バングラデシュ教育が必要なこと、新約聖書の“5 千人にパンを与える”の内容を教えてくれたことでした。私は、この話を聴いて、なんでも疑わないより、信じて見ることが大切であるということです。そして、自分のやりたいと思う心を何よりも大事にすることです。現在、特にやりたいと思うことはないですが、スタディーツアー後は、人の様子からではなく、自分で考えを述べるようになったと思います。それから、人のことを気にしすぎることも減りました。

また、ボクシガンジの小学校に訪問したことも良い経験となりました。子どもたちの授業態度は、どの学校も真剣に勉強していました。授業形式は、先生が教えている内容を覚えた上で子どもたちが先生の立場になって授業内容を理解するという形式でした。日本では、覚えて問題をとくという形式だったので、先生の立場になるという授業形式は、刺激的でした。そして、彼らのひたむきな姿から、大学の授業をもっと成長したいと思うようになりました。

また、2 校目の学校を訪問した際に、iPhone を子どもたちに見せました。そしたら、珍しそうに見て楽しんでいました。そこから、子ども心を思い出しました。私が子どもの頃、新しいものに興味もって、お菓子商品の新作はお母さんにおねだりしていました。私と同じではいですが、純粋に新しいものに興味をもっていて可愛いなと思いました。

今回、スタディーツアーへ行って CHILE の活動が役立っているとわかった上に、自分の考えかたもみなさんと関わるとことで、良い方向にかわることができてよかったです。ただ、また日本に戻って日本の環境に慣れてしまう自分がいないか本当に怖いです。少しでも変わらないように、バングラデシュでの出来事は毎日覚えて行くようにします。そして、バングラデシュのことを知ってしまったからには、残りの CHILE の活動でできること、自分の立ち居位置など考えて、活動していきたいと思います。また、この 2 週間で出会えた人やお世話になった方々の繋がりも大事にしたいと思います。心から感謝します。

ボランティア団体 CHILE として

中部大学２年　藤井　龍成

私はバングラデシュに教育支援をしている「CHILE」という団体に所属しています。
しかし、私はバングラデシュを支援しているにも関わらずバングラデシュに行ったことがありませんでした。
自分が支援している国へ行きたい。人から聞いた話や写真で見るだけではなく、実際に自分の目でバングラデシュを見たい！
そんな気持ちでこのツアーに参加しました。

小学校訪問では熱心に先生の話をきく子供たち、楽しそうに授業を受ける子供たち、頑張ってダンスや踊りを披露してくれる子供たち。色んな子供たちを見ることができました。
その子供たちの熱心な顔、楽しそうな顔、頑張っている顔は今まで見たどの写真の子供たちよりも、私の目には何倍も輝いて見えました。
この子たちの輝きのためなら私はこれから、ボランティア団体 CHILE として、もっともっと頑張れる！
と感じました。

私はこれから、この子供たちの輝きのため、そして、バングラデシュのため活動していきます。
そして、壁にぶち当たったとき、この子供たちの輝きを思い出すと思います。

このツアーを通して私と関わってくれた全ての人に感謝したいです。

本当に本当にありがとうございました。

ドンノバット！！！

バングラデシュに行って

共愛学園高校二年　石井優衣

小学生の時、ベンガル人の兄弟と知り合った。それから、バングラデシュに興味を持ち、調べると最貧国であるとされていることを知った。中学に入学し、このスタディーツアーの存在を知り、ずっと参加したいと思っていた。いろいろな情報はあるけどそれらは本当なのか自分自身で確かめたかった。

空港に着いてから滞在先のプーバイルに向かうまでの車内で様々なものを見た。道路は車でいっぱいでずっとクラクションが鳴っていて、道路の両側はビルや高い建物が並んでいて、想像より現代的で驚いた。しかし、物乞いや所々にあるゴミの山を見て発展に人々が追い付いていないように感じられた。初日から早速考えさせられることだった。

私はCグループでボクシガンジに五日間滞在した。準備会でボクシガンジには電気が無いと聞いていた。日本にいたら電気なしの生活なんて考えられないし、私自身経験したこともないからわくわくしつつも少し不安もあった。しかし、ろうそくで照らされているオフィスは私の好きな映画の風景のようだったし、生活してみるとろうそくがあれば電気がないことで不便だと思うことはなかった。月明かりの下で様々なことを話すことができ、とても充実していた。

ボクシガンジとダッカのスラムの小学校を訪問したり、BDPオフィスに来た子どもたちと出会えたことは本当によかった。机がガタガタしていたり教室が狭かったり薄暗くても先生は熱心に指導し、子供たちは目をキラキラさせながら勉強していた。十分な施設ではないし、十分な勉強道具を持っているわけじゃないけれど、みんな一生懸命勉強していた。その姿に心を打たれた。オフィスにきた子供たちとはたくさん遊んだ。みんなかわいい笑顔で私も自然と笑顔になり、元気をもらった。

バングラデシュに行って、私たちはたくさんの物に囲まれて小さいことで不満を言って感謝することを忘れ、人と人とのコミュニケーションが減っていることを感じた。また、たくさんの人と出会い心配する友人ができた。その人たちの顔と出会ったときに感じていた愛を思い出して私にできることをして協力していきたい。そして、バングラデシュに行くことができ、素晴らしい経験をさせてくれた家族、BDPスタッフ、ACEFメンバーに感謝します。

本当のことを伝えたい

横須賀学院高校２年　　牧山理穂

世界最貧国の一つといわれているバングラデシュ。　衛生面や食べ物、そして言葉。　日本とは大きく異なる生活環境で２週間生活できるのだろうかと緊張と不安でいっぱいでした。
バングラデシュに到着し街を見るとそこには日本では考えられない車線や信号のない道路、そしてその道路を当然のように横切る人、道路の脇にはゴミの山。　初めて目にする風景にただ唖然とするばかりでした。　老若男女問わずに私たちが乗っている車に近寄って物乞いをしてくる人。　「これが現実なんだ」と思うしかありませんでした。
私はＣチームでボクシガンジにいきました。　そこは電気水道ガスが一切ないところで、食事をするにもシャワーをするにもトイレをするにも抵抗はありました。
でもそれは初日だけでした。　日本で何不自由のない生活が送れている私たちにとっては不便で仕方ありません。　ですがボクシガンジに住んでいるにとってはこれが普通であり当たり前なのです。　与えられたものが少なくてもそれをどうにか工夫すれば生活できるのです。
実際に行ってみて私は思いました。　「ここは本当に世界最貧国なのか」と。　確かにバングラデシュは豊かな国ではありません。　たくさんの問題を抱えています。　経済面や衛生面、学校に通う事のできない子ども、物乞いをする人。挙げればきりがありません。　ですがバングラデシュの人はそんなことを感じさせないキラキラの笑顔でいっぱいでした。　２週間という長いようで短い期間でしたが、私は多くの人と出会い、たくさんのことを学びました。　BDP のスタッフの方々、一緒に２週間を共にしたメンバー。　感謝の気持ちでいっぱいです。　そしてバングラデシュで過ごした日々は私にとって大切な宝です。
ありがとうございました。

みんなおつかれさま

編集後記

ぽんちゃん

書いていて バンコクにまた 行きたくなりました。楽しかった思い出がたくさんつまった報告書です!!! 作成に携れることができてよかった お疲れ様でした

りほ

バンコクのことを思い出し、浸りながら振り返りました!年上のお姉さん方に頼りっぱなしでしたが編集部員になれて良かったです! みなさんお疲れ様でしたぴ

シェリー

最後の最後までバタバタしてました。けれどみんなで協力して仕上げた報告書は良いものになりました!! 楽しく出来ましたぴ お疲れ様でしたゃ

まりぴー

編集をする時に思い出ながら色をつけるのが楽しかったです! お世話になった方々を考えて色をつけることができて嬉しかったですぴ! みんなおつかれ様でした☆!!

みゆ

とっても楽しかったバンコクのスタディーツアーを振り返りながら編集するのは、すごく楽しかったです。ぎりぎりでしたが良いものが出来て良かったです。

せいら

自分で気付かなかった、滞在中のアルコルを、記録を見ながら皆とシェアしながら振りかえりながらアルして、非常に感謝、楽しかったです。バババット〜♡

安達先生

写真選択では色々苦労しましたが、ツアーの事が思い出されて、楽しかったです。編集会議がEP最高でした! ありがとうございました。

バングラデシュに寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。

ACEF 会員募集

個人会員	年額１口	5,000 円
団体会員	年額１口	50,000 円
学生会員	年額１口	2,000 円
一時寄付	随時	金額自由

郵便振替　00100-0-185540
特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金

〒169-0051　東京都新宿区西早稲田 2-3-18-26
TEL. & FAX. 03-3208-1925
E-mail:acef@acef.or.jp
http://www.acef.or.jp